

佛說云「報怨以<sup>テ</sup>徳爲<sup>テ</sup>善。以<sup>テ</sup>恩報<sup>テ</sup>怨今永<sup>シテ</sup>」自他安穩<sup>ル</sup>」

## かノ部

○かいこぼれ 田舎にて稻の收納にかいこぼれといふことあり。又檢見といひて、國の守より其年の豊凶を試むとて、一坪づゝからせて量り見る、其こぼれをもかいこぼれと云て、民の徳分にあつるなり。神樂早歌に「をみなのざえは、霜月しはすのかいこぼり」とあり。こは稻を納めなす時にかきこぼれたる糲を、女兒との財とするをいふ也。

○かいしき 倦言に物の一つも無事をかいしきないと云ことあり。こは皆一色無<sup>ナシ</sup>といふことの約れるなるべし。又折敷物などに南天の葉、笹葉等を敷をも、かいしきと云。こは搔敷<sup>カキシキ</sup>の義也。類聚雜要抄一に「上紙十八枚、搔敷紙八枚」など見えたれば、此かいしきの名はやゝ久しき時より云しならん。

○かいしやく 介錯也。旅宿問答云「鎌倉御下向の時分介錯として下着あり。太平記には、大塔宮御始終にうけてまわらせ給ひし南の御方と申す女と

あり云々」と見ゆ。切腹の介錯と云もこれらより轉じたる歟。

○かいだり 「だるい」を見よ。

○かいぢやう 開帳也。中原康富記云「文安元年十月二日、梅尾春日大明神御影御帳被<sup>レ</sup>開<sup>レ</sup>之。南都大乘院被<sup>レ</sup>所望申<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>開<sup>レ</sup>之。此次所望之族上下道俗男女拜見無<sup>ニ</sup>子細<sup>ニ</sup>之由兼有其聞之間。奉<sup>レ</sup>伴<sup>ニ</sup>清大外史并藏水等。今日參之令<sup>ニ</sup>拜見<sup>ニ</sup>了。其儀有<sup>ニ</sup>開帳<sup>ニ</sup>寺家之衆有<sup>ニ</sup>講論之儀式。其後南都衆有<sup>ニ</sup>法樂<sup>ニ</sup>之後大乘院殿有<sup>ニ</sup>御拜見<sup>ニ</sup>。御退出之後諸人群集頗狼藉之躰也。梅尾本堂ヨリ遙ニ東ニ倚テ有<sup>ニ</sup>檜皮葺堂一字<sup>也</sup>。南向春日御影西ニ奉<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>之繪像住吉御影彼是両鋪也。殊勝云云」二水記「永正十八年二月八日。早旦詣木屋樂師堂鳩從去月開帳也。聖德太子御作云云。古物御面貌不憊。八百年無開帳云云」

○かいどりすがた 徒然草に「物もさあへず、いだきもちひきしろひてにぐる、かいどりすがたのうしろて毛おひたるほそはぎのほどをかしこつきぐし」

かしは涯分と書て、身の分限をいへり。明月記「嘉祿元年十二月廿三日云々。答云。本自存此由不顧身涯分可申入由許讓退出云云」

○講　　講中　　梅窓筆記上云「講ト云コト近年ノコトナラズ」吉田鈴鹿家記「永享二年八月、來ル廿八日伊勢講私所ニテ仕候云云。同月春日講中皆大和ヘ參云云」同記「應仁元年十二月、聖護院村田中

村吉田村中略春ノ稻荷講二三ヶ村衆寄合被申候云云」

今按に、後拾遺釋教に「山階寺の涅槃講云云」また

「故土御門右大臣家の女房車上に乘あひて、菩提講

に參りて云云」續詞花連歌に「日吉社の禮拜講といふことに、また前中宮の越後、あみだ講おこなひけるに」など見えたり。此外舍利講、普賢講、報恩講

など云類あまた見えたり。

○かうく　　今も上方の人は「かやうくいへ」と云ことを「かうくいへ」と云り。伊勢物語に「友だちのものにかうく今はとてまかるを、何事もいさゝなる事もえせでつかはすことかきて」

○かうこ　　「じやうご」を見よ。

「かんだう」を見よ。

○勘事

○好事カウジを行て前程を問ことなけれ。言行錄後集五「趙抃清獻公字閱道衢州人云云。清獻公座右銘云行好事莫問前程」、皇朝類苑三十六云「馮瀛王詩

云云。但知行好事莫要問前程」

○かうじん　　幸甚也。文選、答蘇武書李少卿「勤宣令德。策名清時。榮問休暢幸甚」

○かうす　　好事也。前漢書王莽下「好事者竊言。此豈如古三皇無文書號謚邪」文選「與侍郎曹長思書

應休璽學非楊雄。掌無好事之容」

○講中　　「講」を見よ。

○かうのけぶり　　新撰六帖一、光俊朝臣「もえつ

いくかうのけぶりのときうつりひとつじのあゆみけふもほどなし」

○かうばし　　かんばし　　馨也。こはもと香細カシニ

を音便に唱へ習へる詞也。又是をかんばしともいひなせり。冠をかうぶりとも、かんむりとも云と同例にて、異國ぶりの音便はウンツと云るゝ事多し。かゝるいひなしも、久しく馴ては詞にもいはれ、うたにさへよむ事となりにたり。夫木集十二、秋、花山院御製「秋のたをふきくる風のかうばしみこや袖の

○勘事

ころにはひなるらん

○かうべ かしら あたま みぐし 厥丁

田子桶 首也。和名抄云「首頭。釋名曰。首始

也。和名加字倍。頭獨也。訓上同。一云。賀之良言處。體而獨貴也」とあり。然れば先此言は、上方の音便なるべし。又かしらと云も、髪に就て云稱にて、

髪代の義にやあらん。さて賤者の言に、主人、親または其類屬の首長を指て、加之良と呼も、首頭に比して云稱ならん。又其頭を阿多麻と云も古きこと也。

神代紀に「八咫鏡」「八咫鳥」などあるも、八頭の意なればなり。和名抄にも頭に、あたまの訓もあり。云、「針灸經云。頸會一云。天窓。和名阿太万」と見ゆ。是又今の俗言に、大家、豪福等を指て、大頭と

云ことあり。さて此頭を美具志と稱するは、いかなる義にかあらん。記傳云「美久志と云訓は、凡て貴人のをば後にも加之良とはいはで、然云めり。久志はもと髪の事か。くしけづると云も、髪をけづるなり。さて髪をけづる具なれば、櫛をも久志とは云か。そはくしけづりと云べきを、略て然云は、たとへば庖丁がつかふ刀なれば、庖丁刀なるを、やがて其を

も庖丁とのみもいひ、田子の持桶なれば、田子桶な

るを、田子と俗の云も同じ。又は髪のある處なる故に、頭をも美久志とは云か。然はあるど櫛の名はいと古ければ、此を本にて、其を刺處なる故に髪をも頭をも云なるべし」とあり。此内美具志の事は、猶よく考ふべし。庖丁、田子の譬は、おもしろし。大かたの物の名にも、例あることなり。

○かうみやう 名高きにもいへど、世俗には多く手がらの方にいへり。それも譽れより轉れるなれば、ひが事にはあらず。更級日記に云「ともなる者どもかうみやうのくりこま山にはあらずや云々」徒然草「高名の木のはり」後漢書廿五韋彪傳「兄順字叔文。平輿令。有高名」

○拷問 考問 推問 拷問と考問とは相似て同じからず。先づ拷問は笞杖にて打て、其罪に伏ざるを責て問事を云、又考問と云は其罪の當否を考へて、決斷するにて、推問と云に同じ。拷字は正字通に「苦老切音考。打也」と見ゆ。されば音は同じかれど、打と考ると其意異也。前漢書九十七外戚班健

仔傳「許皇后廢。考問班健仔」後漢書六十七周矯傳「密

問守人曰云々。對曰。廷掾疑君。乃收廷掾考。問具服。不殺人取道邊死人云々とあるが如し。さて古老雜談に「神尾備前守町奉行の時、老中松平伊豆守の館へ行て、物語のついでに、何某の罪人は拷問申すべきや否と問けるに、其事はきかぬさまにて、只よく推問有べしとのみ答へられしを、後に人の其故を問ければ、答て、すべて拷問と云事は、奉行の恥とする事也。その故は、推問、考問、穿鑿の足はぬ故にこそ拷問もいる事なれ。もし拷問をむねとせば、奉行の智恵才覺はふつにいらぬ事にこそあらめとぞたへられきとかや」

○かうをきく 聞香也。無量壽經上「若欲食時。七寶鉢器自然在前。金銀。瑠璃。磚砾。碼碭。珊瑚。琥珀。明月真珠。如是諸鉢。隨意而至。百味飲食。自然盈滿。雖有此食。實無食者。但見色聞香。意以爲食。聞香知所在」猶此法師功德品のうちには、毎條聞香の字多く見えたり。しるすにいとまあらず。文選、思玄賦張平子「播余香而莫聞」維摩經八「菩薩各々坐香樹下。聞斯妙香」

○かゝ 摻海一得上云「今小兒、母を指てかゝまと云。是は家々の字也。通鑑陳宣帝紀曰「北齊後主泣啓大后曰。有緣復見家々。無縁永別云云。」胡三省注曰。齊諸王呼ニ嫡母ニ爲ニ家々」とあり。いつの比よりか日本に云傳へたりけん。子が母をかゝと呼より轉て、父よりも妻をかゝとよぶ也」と記せり。今按に、よく似たることながら、さる異國のことの、こゝの小兒に轉るべきはれなし。此方は別に其よしあるべし。今の俚言に、夫より妻を指て云ふこともあるは、右の説の如く、子より呼稱への轉りたるにて、妻より夫を指て、親父とも云と同例にて、これ實は轉じたるにはあらで、其子に對へて云稱也。さてもかゝとはいかかる意の唱へにかかる。未得考へず。もししひていはゞ、部屋住のあひだを親にかゝると云如く、乳ぶさにかゝりて養はるゝ人なれば云歟。万葉五丁戀三男子名古日一歌に「可加良受毛可賀利毛神乃末爾麻仁等」と云こともあり。又父の一稱に加曾と云もあり。可考合。又かゝる條をも見合すべし。

○鏡の裏に南天燭<sup>ナシツク</sup>を鑄つくる事

世に鏡のうら

に南天燭を鑄付る事を、易の離卦乾象に引よせて云  
説は、なか／＼に附會なり。漢籍の未渡らざりし已前  
の鏡にも、既に其圖見えたれば、本よりの習はしにて  
由縁有ことなるべし。もしさは天岩屋戸の故事により  
て、常夜行し世の更に明かになりつる壽<sup>木</sup>ごとにて、  
日の盛なるよし歟。そは日の南天に亘るは朝日の豊  
榮昇に上る方なれば也。

○かゝむ 「老かゝむ」とも「指がかゝむ」とも

云。夫木抄廿七雜、源仲正「今はわれ世をうみにす  
む老えびのもくづが下にかゝまりぞする」爲忠集「春  
ごとに老をしらするさわらびのかゝまる末のよこそ  
つられけれ」

○かゝりあふ 夫木抄廿七雜、衣笠内大臣「い  
くも雲々」

○かゝりあふ 「親にかゝる」「子にか  
りそめては」

○かゝる 紺の懸り 「親にかゝる」など云かゝる也。空穂、俊隆下「つかふ人も  
なくてあれたら宿に、只ひとりすみて、まろがま  
らする物にかゝりたまへる母を、持たてまつりたり」

又藤原君十九 「むすめども十餘人にかゝりてあな  
り」などいへり。又夫木抄廿一雜、よみ人しらず「ま  
りのをか河をかゝりと思ふらんかたうつ波の音ばか  
りして」是は紺の掛なりけれど、語の本は同じ意也。

○かゝる 所もない 藤原仲文集「男おとせざり  
ければ、左京「ともかくもいふことはの見えぬか  
ないづらは露のかゝりどころは」後撰集十懲二「く  
にもちがおともせざりければ、つかはしける。ともか  
くも云々」

○かきだし 江家次第九に、書出と云こと見え  
たり。其前後文を見合するに、記し置たることゝも  
を、一に書出すよしなり。今商人の家に云書出しも、  
帳面より書出したるよりいひて、つひに同意のこと  
なり。

○かきちらす 「ほぐ」を見よ。

○かきつらぬる 夫木抄十二、秋、三條入道左

大臣「かりがねのかきつらねたる玉章はあさみどり  
なる空のいろかも」

○かきねむかひ 夫木抄九夏、喜多院入道二品親  
王「かびたつる垣ねむかひの細道はみやこの人に見  
せまうきかな」

○かく 「雪をかく」「砂をかく」「落葉をかく」などのかく也。夫木集十八、冬、源仲正「夜もすがらふせやがうへにつむゆきをいくたびかかきつこゝのさと人」此外「かゆき所をかく」「文字をかく」なども同語なり。又「耻をかく」など云は、もしかじらかく方より轉じていひそめたるか。義經記に「辨慶云々してかしらかくまで赤はぢをかゝせたり」といへり。

○かくしづまを於遡といふ事 「おに」を見よ。

○かくす事はあらはる、 玄帝垂訓云「人間私語。天聞若雷。暗室虧心。神目如電」

○かくす事は口のうち 前漢書云「欲三人勿聞莫若勿言」これらはたゞ似たる事を合するのみ。あながち此に依て云とにはあらざるぞ。

○かくべいじ、 今も越後より多く出て、頭に

雞尾をうゑたる獅子舞あり。世に是を角兵衛獅子と稱す。山岡妙阿云「こは角瓶獅子を訛り傳へたるならん。長崎にて鹿躍といひ、仙臺にて仰山鹿躍など云も、此類なるよし、皆古風のものなり」といへり。述異記上「軒轅之初立也。有蚩尤氏。兄弟七十二人。

銅頭鉄額食鐵石。軒轅誅之於涿鹿之野。蚩尤能作雲霧涿鹿今在冀州有蚩尤神。俗云人身牛蹄。四目六手云云」奏漢間說「蚩尤氏耳鬢如劔戟。頭有角與軒轅。以角瓶人。人不能向。今冀州有樂。名蚩尤戲。其民兩々三々。頭戴牛角而相瓶。漢造角瓶戲。蓋其遺製也」

○がくや 樂屋也。夫木集卅二雜、源仲正「ふ

りことるみは、のがくやこま笛にうちあはするはからつゝみかも」源氏、胡蝶卷に「わざとひらはりなどもうつされず、おまへにわたれる廊を、がくやのさまにして、かりにあぐらどもをめしたり云々」

○かくれ笠

「かくれみの」を見よ。

○かくれづま 夫木集卅五、衣笠内大臣「をとめ子があはせ衣の、かくれ妻うすきちぎりにうらみわびつゝ」

○かくれみの

かくれ笠 隱蓑也。拾遺集雜

賀「しのびたる人のもとにつかはしける、平公誠「かくれみのかくれ笠をもえてしがなきたりと人にしられざるべく」新撰六帖五、信實朝臣「きまほしき世のうき時のかくれみのなにかは山のおくもかひな

し」同衣笠内大臣「かくれみのうき名をかくすかた  
もなし心におにをつくる身なれば」

○かくれんば 空穂、初秋に「草のなかに笛の

將かくれあそびをやし侍らんと聞し給へば云々」朱雀院 菊

ねし侍るをたづねてなんうへ草笛をこそ吹けれ。大  
花、つほみの花に、長和三年の下「をとこ君はいみ  
じうおもひ聞え給へれど、猶いと心づきなく、とも  
すれば御かくれあそびのほどもわらはげたるこゝち  
して、それをあかぬことにぞおぼされたる云々」と  
ある、此かくれあそびは今世にかくれんばと云童遊  
びの事と聞ゆ。物類稱呼卷五云「かくれんば出雲に  
てかくれんごと云。相模にてかくれかんじやうと云。  
鎌倉にてはかくれんばと云。仙臺にてはかくれかじ  
かと云」とあり。今按に、かくれんごは隠れごとの  
略かくれくわんじやうは隠れ灌頂歟。とらまへられ  
たる者に水を灌ぐ事あれば也。かくれかじかは鰐の  
石間に隠るにたとへたる歟。かくれんばは見つけ  
られたる時はアと云ふに、その聲をばに轉じたる  
ならん。(猶「ばあ」を參照せよ)

○かけあひ 茶の子 歌を兩方にてうたふを

かけあひといふ。そのかけあひを古くは約てかゝひ  
といへり。そを又うたがきと云も、歌かゝひにて、  
うたもて双方よりかけあふをいひき。其事は雅言姫ノカタ  
合條下に委く云べし。既に鐘の響の中にもいひおき  
つ。さて淺井三代記十四、信長卿江北發向之條に「そ  
の後、虎御前山と小谷山と、敵味方の若者とも掛踊  
をかけあひける。信長方の若者とも田川野邊より  
來り躍りける、其歌に云「淺井が城はちひさい城や  
ア、よい茶の子朝茶の子」とうたひて躍りければ、  
淺井が若者どもの返しうたに「淺井が城を茶の子と  
おしやる赤飯茶の子こはい茶の子」と云てをどりて、  
次の躍りに信長方へ懸けるうたに「信長殿は橋の下  
の土龜よ、ひよつと出て引こみ、ひよつと出て引込  
も、一度出たら首をとろ」とかけあひける。今に當  
國草薙童の口すさみとなれり云々」と見ゆ。今双方  
より理非を論じあふをもかけあふと云り。相對して  
するを以て也、茶の子、此程よりひしがめづらし  
ければ引つ。

○かけおつる 空穂、只社「たい／＼しけれど  
うけ給はるに、かたはらのものかけおつるこゝちの

すれば、かくとり申すなり」

○かけがねをはづす。夫木集冊一雜、信實朝臣「世をそむくしばのあみ戸のかけがねのおもひはづせば人ぞまたる」

○かけがへ。萬の物に掛替と云あり。弓の弦より出たる歟。又旗帷帳等より云出たる歟。平戸記、延應二年二月條に「殿下北政所令參春日社給。予依召引献懸替牛一頭」とて、牛にさへ此稱見えた

○かけご。懸籠也。拾遺戀一、よみ人しらず「君をのみおもひかけごの玉くしげあけたつごとにこひぬ日はなし」金葉雜下、よみ人しらず「玉くしげかけごにちりもすゑざりしふたおやながらなき身とを

「ぬ日はなし」金葉雜下、よみ人しらず「玉くしげかけごにちりもすゑざりしふたおやながらなき身とをしれ」相摸集「袖かけはいはぬさきより人しれず君がかけごにならぬとぞおもふ」源氏御幸「ふたかたにいひもてゆけば玉くしげわが身はなれぬかけごなりけり」「枕冊子九十九」「ふたつかけごの硯」

○かけご。某つく。賭碁也。此わざも古き時よりの事也。空穂物語、初秋に、仲忠が帝と碁を打て負奉りたる處に「うへ興ありとおぼしめして、は

やう賭物豆久の事はと仰せらる云々。仲忠、身に堪ぬべき事ならば仕奉り、堪ぬ事ならば、其よしをこそ奏し侍らめ云々」これは碁の負わざをせよと仰せられたるなれど、其心猶賭碁と同じことなり。此外古く的弓、騎射などは更にもいはず、相撲、圍碁等のうへにも物を賭てせる事多かり。又かの賭物豆久。又古事記、明宮殿に「山河之物悉備設爲三宇禮豆玖云爾」また「不レ債ニ其宇礼豆玖之物」遊仙窟に「賭酒」とも「賭宿」ともある類は、錢金づく力づくなど云、豆久と同じ。厚顏抄に、此空豆を、債ふの略き也といへり。

○かけぢ。邊土の民、稻をかけはす、竹架をかけぢと云は、懸稅の略語なるべし。神嘗祭詞に「由紀能御酒御贊。懸稅千稅餘五百稅乎。如横山久置足波志氏」とある是也。賦役令義解に「凡官稻之源出、自田租、卽分爲三。一曰三大稅。二曰三糴穀。三曰三郡稻也」とあり。此稅は諸國に貯置也。たとへば十五万束の稻を民に割付て貸、その元を大稅と云上る。是を糴穀と云。糴にて上る故の名也。右の大

税を田力と云は、春百姓の借て田を耕す力とするよ  
し也。かくて此懸枕は、穂をみごしより切て、束  
稻になして掛ほす也。今其竹架を云は、詞の轉じた  
るにこそ。

○かけづくり 猬造也。新撰六帖六、信實朝臣  
「かたぎしにあらぬ軒ばのたよりにもかけづくりな  
るさゝがにのいと」今俗はこれをかけづくりと獨り  
てよべり。野守鏡序「山高くかけづくるかまへ云々」  
中務内侍日記「かけづくりなるに、しばがき、やり  
水など、はかなきものから」

○かげにあたらぬ 山家集下「いむといひて影  
にあたらぬ今夜しもわりて月みる名やたちぬらん」

○影のかたちにしたがふがごとし 太上感應編  
云「禍福無門。惟人自招。善惡之報。如影隨形」

法句經云「福樂自追。如影隨形」

○かけはなれ 右京大夫家集詞書に「かけはな  
れいへはあながちにつらきかぎりにしもあらねど云  
々」

○かけもつ 物をあひ撮てするをかけもつと

云。夫木集廿八難・西行上人「かりのこすみづのま

こもにかくろへて、かけもちがほになく蛙かな」

○かけもどる 爲忠朝臣集「ぬじもなき夏の、  
原のはなれ駒こゝろのまゝにかけつもどりづ」

○かこ 水手也。今も船頭水手と云めり。万葉  
四十六「水手之音喚」七四十「海中にかこぞよぶなるあ  
はれ其水手」此外十三三十一丁十五丁又十三二十丁十八又八丁

等にいづ。和名抄に「舟子水手」かくありて、今本水手  
釋を失ひたり。

○かご 駕籠也。今川貞世が、鹿苑院義満大將  
軍の巖嶋詣記に「御前の濱の鳥居のほどより、かご  
にて御船にうつらせたまへり」と云り。かゝれば此  
程既に此物有しにこそ。

○がどうじ 小兒をおどす時、古俗かく云て、  
貌つきせし事物に見えたり。今も、シングワアと云類  
也。神社考云「今案俚諺俗語亦有所據。世之賺恐  
小兒者怒目開口呼曰三元興寺。是元興寺昔有鬼也  
云々。故事委三神社考」とあり。これによれば、が  
ごうじはげんこうじを訛れること歟。

○かこひもの 「かこふ」を見よ。

○かこふ　かこひ茶室　かこひもの　一 携也。

カコフ

曾根好忠集、六月初「かこはねどよもぎの籬夏くればあらの宿もおもかくしつ」堀川百首、國信卿「かこひなき柴の庵はかりそめのいな葉ぞ秋のまがきなりける」爲忠朝臣集「さみだれに笠ひきかこふあまをぶね竿さしわくるあしの葉末を」などよみたり。垣といふも此かこひといふを體言になしたる也。

こひは、きと約る。又茶室に云も、本かりそめに構ひなしたるより稱となれる也。又「柑子をかこふ」「瓜をかこふ」など云も、雨露風霜を除んだために構ひして、いたはる方よりいひそめたる也。又江戸にて隠妻を、かこひ者といふも、人にしらせじとて、構ひおくよりいふ也。

○かこむ　惠慶法師集『東山に花見にありくとて「山ざくらちかくみんとのこゝろにてけふはかすみにかくまる、かな』

○かさ　笠　瘡　物の多少を「かさが多い」「かさが少い」と云かさ也。空穂物語、藏開に「かさたかく入て云々」又「こてこきてかさ高くいれたる」など云り。爲忠後百首「水上に花さきぬれば布引の

瀧のしら糸かさまさるらし」玉葉集十四「川浪はしひにおよびて五月雨のみかさに舟のさをもみじかき」此外水かさとは常にあまたよみたり。又軍書に、軍勢の多きを勢がさと云ること多し。應仁記下「著到を付て勢笠を見んとて蒐て」など云が如し。又蓋、笠、傘の類を云も、かさ高きになる物ゆゑに云歟。又椀の蓋覆を云も、其心ばへ同じ。又瘡を云る其形容、笠をふせたる如くなるより云歟。いせ物語に「女身にかさひとつふたついできにけり云々」又「今は何のふしもなし身にかさひとつふたついでたり」などあり。

○かさ　「ひら」を見よ。

○かさ　暈也。今も「お月さまみかさめしたり」など云り。和名抄に「郭知玄切韻云。暈氣繞日月」也。音運。此間云「日月左」と有。中昔後のうたにもよみたり。

○かさかけ　笠掛也。中右記「寛治六年二月八日辛酉。卯時許人々參會還御。先權別當法印濟尋參御宿所給御馬一匹。中納言殿御裝束直衣濃打衣出衣薄色御奴袴野太刀。頭辨衣冠。自餘皆布衣。辰時

計於加波多河原暫留御馬。前駆皆下馬候左右見爲御覽義綱朝臣武士也。一々騎馬渡之廿人之中仰可射笠懸之由。武之中能射者一人爲射笠掛又渡南云云」明月記「文歷二年嘉祐元年也二月十四日。今日於河治泉馬場修理亮奏綱遊放歟。笠懸白拍子醉鄉歟」東鑑「壽永三年五月十九日。於由比濱杜戶松樹下有小笠懸同建仁四年正月十二日。將軍家於由比濱射愛甲望月海野等於遠笠懸云々」採施集覽「笠懸とは如何。答、馬上の業也。遠笠懸、小笠懸の二種有。中古は馬場を二町半にして溝を堀通す。上下に馬に入る程の大溝をほる。是を足入といふ也。形は三角也。的山を築て的を掛る。的の寸法古來の秘事なれば不記云々」豊後守高忠聞書云「笠掛けとは、あや蘭笠をかけて射たるによりて笠掛けといふなり」曾我物語三「あはれ父だにましまさば、馬をも鞍をも用意してたびなまし。さあらば犬おふもの笠掛けをも射ならひなん。我らよりをさなきものも、世にあれば馬にのり、もの射る見るもうらやまし」安多武久路上云「惣て笠懸と云物は往古の惣名也。笠とは目印の事也。其目印の笠を懸ると云儀にて、

笠懸と云成べし。目印の事を笠といひしは、平家物語、曾我物語等に見えたり云々」又「大永の比將軍義晴公、細川馬頭以下、在京の諸將相議して、月に一度の笠懸興行有べき由仰出され、北野右近の馬場にて二寸の的を三所に懸て、射手二人左右に並びて馬上にて三度往反して射たる也云々。又馬上三物といふなり」など見ゆ。猶考ふべし。

○かざし　　插頭也。花鳥餘情云「石清水臨時祭、使には藤、舞人には櫻、陪從には山吹」とあり。永久百首石清水臨時祭并月詣集雜上等に、其證歌出たり。江次第二「孟旬抄云。左插頭吳竹右歎冬」とあり。万代雜二、楊貴妃を、光頼「かたみとてをりく」ごとに見るのは涙の玉のかざしなりけり「今世にも「花をかざす」「もみぢをかざす」など云、又「扇をかざす」など云類は、少し轉じたる也。此かざしを古くはうすといひき。されど万葉にも「かざすともよみたれば、是も久しき詞也。今云かんさしの事は下にいづ。

○かざした　　風下也。永久四年百首、仲質「まさご吹花のあたりの風下は時ぞともなき雪ぞふりけ

る」

○かさのうはゝ 夫木集十一、秋、藤原範綱「い

なみのをあさふみわたらかり人のかさのうはゝにな

びく萩原」

○かざばろし 和名抄に「病源論云。風癒胗和名

加佐保路之人皮膚虛シナ爲風寒所ルハ折則起也」

○かざりうま 裝束馬也。空穗、祭使十二「兵部

丞かざりうまにのりてらちにむきて馬の毛申給へ

り」

○かざれ 曾根好忠集、十二月初「み山には山のあらしのあらげなりしひのかざれいくそかく

れり」

○かし 河岸 犀牀 椅械

江戸にて湊

の川邊を、河岸と書いて、其意と思めるやうなれど、然にはあらず。船の状況たてゝ、着處なる故に云そめたる也。万葉七十七に「舟盡可志振立而いほりせんなこ江の濱べ過がてぬかも」此外十五丁二十四等にも見ゆ。和名抄十二「狀舸。唐韻云。狀舸械舸二音漢語抄云加之所以繫舟也」とあるが如し。此字漢籍には、後漢書七十六「牂柯」楊升菴文集六。漢有牂牁郡二字一作二

咸武。其字從弋弋杙也。繫船木也云云。蜀江舟師謂之咸竿」などありて、まさしく狀舸と書たる見

えざれば、謬れるかともおもへど、出雲風土記にも狀舸とあれば、古く書ならひたるに決し。さて此名

を加之と云言の意は、馬を駆代をうませと云と同じくて、杻械の加之の義也。和名抄に「杻之天加械阿之」

と見ゆ。

○かじかむ 「かじける」を見よ。

○かじき 夫木集十八冬、源仲正「かじきはく

越の山ちの旅すらも雪にしづまぬ身をかまふとか」雪の深くなれる比、小木を横にあみて、足にはきてありく物也。

○かしづく

冊の字をかしづくとよめり。又太子大傳などの傳をも、しかよめることあり。尊むか

たにもいひ、又おやの寵愛する娘などをいふ。今世にむげに物しらぬものは、娘などを縁づくる事を、かしづけると云めるは、甚しきひが事也。伊勢物語に「人のむすめのかしづく、いかでこのをとこにものいはむとおもひけり」源氏桐壺「右のおとゝの御中は、いとよからねど、え見過し給はでかしづき給

ふ。四の君にあはせ給へり。おとらずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん」

○かじける やさかむ かじかむ 古事記

朝倉宮段に「姿體瘦」姿體瘦書紀、垂仁卷に「身體かじけ」身體瘦天智卷に「憂悴極甚」とある、

瘦弱以不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>祭」天智卷に「憂悴極甚」とある、

今寒さにかじけると云は姿かたより轉れる也。やさ

かむも田舎人の言にはをりく聞ゆ。爲忠朝臣集行

としのつもれる松の霜見れば下葉かじけて見るそら

もなし」夫木十六、冬、俊頼朝臣「よしさらばおふ

るひつちのかじけつ物にもならで霜がれよとや」

これら既にこゝゆる事によみたり。又是を邊土の人

はかじかむともいへり。それも古言也。字鏡に「悴

頬容貌瘦。豆加留又可志加无」とあり。されば市中

の人の手がかじかむなど指の事のみに云なるは、却て轉じたる也。

○かしこまる 山家集下「かしこまるしちにな

みだのかゝるかな又いつかはとおもふこゝろに」

○かしは手 「てうつ」を見よ。

○かしましき 金葉集、戀下「かしがまし山の下ゆくさゝれ水あななかまわれもおもふ心あり」門葉

集夏の詞書に「蟬のかしましなきけるに」

○かしまだち 旅行以前に首途する事いと古

し。台記「久安四年二月十日。入夜向宗俊阿闍梨

房是出門也。十二日。爲道虛日之故也。即行戒。

十二日可參八幡。仍自今日神齋と見ゆ。伊勢人

某隨筆云「伊勢神宮にては旅行以前吉日を撰び、旅

のよそひして此御門神へ參る。是を門出といふ。北

御門神社は、武甕槌神を祭れり。仍て此門出を鹿嶋

立ともいへり」とあり。今按に、東國のみ鹿嶋立の

名はあるかと思ひしに、他國迄もさるならひのある

は、もしはかの大神其はじめ、葦原中國に荒振神を

平定まし、神代の吉例を、遠く傳へたる遺風にもや

あらん。

○かじやう 嘉祥也。嘉定ともかく。世に六月

十六日を云り。此事さだからず。近來人の云所、

公武の嘉例一つに混じたるが如し。恒例行事略云「後

嵯峨院御卽位以前十六日。嘉定錢十六文を以て餅を

求め奉り、御卽位の後も御吉例になりより云々」

嵯川親俊日記云「天文八年六月十六日嘉定イリコノ  
フトニ」同「十一年六月十六日。嘉定如<sub>レ</sub>例認之」新

安手簡云「嘉祥の事又大儀に候。是又當家の吉例に

候。元和元年五月七日、大坂こと終りて、京師へ入

せられ候て、初ての賀儀に候云云」小窓雜筆云「或

人話云。東武柳營ニテ嘉定ノ御規式アルハ、神君遠

州味方原御合戦ノ時、羽入八幡宮ニシテ嘉定通寶錢  
ノ裏二十六ト鑄付タルヲ拾ハセ給ヒテ、諸軍勢へ今

度ノ御合戦御利運ナルベシ。何レモ歎ベキ上意アリ  
テ、折節取合タル御菓子ヲ賜リタルヨリ始レル由  
也」とある、此説既に室町家の時にありし事をしら  
ぬに似たれども、似たる事なしともいひがたし。

○かしら 「かうべ」を見よ。

○かしらかくして尻かくさす 百喻經云「昔有  
愚人曰。我父少來斷絶姪欲。初無染汗。衆人語  
言。若斷姪欲者。何生汝。深爲時人所恠笑。」  
この譬に其心は似たり。

○かしらをなづる

藤原爲忠朝臣集「朝しもの  
庭白たへにおくを見て おい行としのかしらなづめ  
り」

○かすみのにし 夫木集六、春、土御門院御製  
「夕つぐるかすみの西にかたぶきて入あひのかねに

春ぞのこれる」

○かすゆざけ 比糟湯酒字知湧々呂比豆云々

○かすよむ 物の員數をかぞふるをよむと云も

古言也。万葉十二十五また三十等に「よみもあへんか  
も」二十十八に「あら玉の月日よみつゝ」また五十  
も」二十十八に「あら玉の月日よみつゝ」また七十に

「月よめばいまだ冬なり」古今集賀に「濱のまさご  
はよみつくすとも」などいと多かり。歴をこよみと  
云も、來經讀の約れる名なる事甲子を日よみと云が  
ごとし。

○かする 「かそふ」を見よ。

○かせぐ 活潑を出精するをかせぐと云り。撰  
集抄五、大瀬三郎近宗發心條云「ことわりをわきま  
ふる人すら、此かせぎはさりやらぬわざなるを云々」  
唐物語廿七則に「父母世にあらん事をかせぎいとな  
む云々」と見ゆ。かれば是もや、古き時より云こ  
と也。此語はもし持とかく字よりいひそめたる歟。  
此字にかせぎいとなむ意はなけれども、從手並上

下をもて、手をあがき動く意にとれるにやとおぼし  
き事あり。類聚國史百七卷「承和二年三月丁巳。山

城國持山一處爲「內藏寮所領之地」古語拾遺に「以

麻柄一作「持」云々などある類ひなり。

○かせのまへのともし火　涅槃經云「猛火消  
風」夫木十九難、爲家「ゆめさめて見るもはかなし  
山さとの風のまへなるまどのともし火」

○かせひく　今世に云引風の病を、中古の比は

鼻垂疾と云しにや。台記に「日來患鼻垂疾俄身溫」  
また「依鼻垂不念珠。但今日無溫氣也」また「鼻  
垂後始念珠浴」とある、もはら今云風邪と聞えた

○かせをわづらふ　夫木集廿八難、西行「われ  
なれや風をわづらふしの竹はおきふしものゝこゝろ  
はそくて」

○かそふ　かする　上に云、田舎にて人の物

を掠め取をかそふとも、かどふとも、又甚賤き者は  
かすうとも、かするとも云り。さてはかそふと云に  
合すれば、波行の活きて、かすび、かすぶなるべ

きに、定め難き事、次に引が如し、まづかそふは、  
古事記、玉垣宮段に「乃掠取其母王」續紀廿詔詞  
に「加蘇比奪盜止爲而」と見え、かするは、舊紀、

體卷に「捉」また皇極卷に「求捉」天武卷に「捉」な  
ど見えた。これら加須比とはあらずして、加須爲  
と云るは、もしは掠率の意にもあるか、謬とも見え  
ず。又是をかどふとも云ことは、かどはすの條に出  
づ。

○かたい　「あまい」を見よ。

○かたうど　方人也。亭子院歌合云「讀人藤原  
興風、凡河内躬恒、方人むねゆき、よしかせとなん  
云々」落窪一之上「あこぎは三の君の御方人にて云  
々」とあり。其方の人を云。今俗には荷擔する人の

事のやうにも覺たるは轉じたる也。

○かたおち　片落也。新撰六帖二、民部卿爲家  
「みを山やそまのわれ木のかたおちにすてられなが  
らふしはわすれず」

○かたがくれ　續後撰集十一、戀、俊成「谷ふ  
かみ岩かたがくれ行水のかげばかり見て袖ぬらせと  
や」

○かたく　片方也。新撰六帖二、民部卿爲家  
「いかにせん時にひく戸のいでたちにかたく見ま  
くほしきむかしを」

○かたかな 片假字也。作者さだかならざれども、先づは吉備のおとゞ也といひ傳へたり。實は誰が作と云べき程の物にもあらず。たゞ異國へ物習ひに行し人の、心覺のために字のかたすみを取ておばえがきしけん故に、かの大臣の作とはいひ傳へしならん。されば古へは必しも其字定らすして、人々の心々に省きて書しさま也。平假字も古き時は草の手より出て、あながち誰が作と云べきにはあらざるべし。かの花鳥餘情に「弘法大師是を作らる」とある頬ひは、いろは假字の字形の事なるべし。彼字形は實に大師の作にして、漢字を以て其音どもの形ちを寫して、略草を作り出られたる事、まろ其眞跡を見合せて考へ定めたるものあり。世に此事をしらぬ輩は、其陋俗也とのみ思ひて疑ふめれど、然にはあらず。さて片假名と云名は空穂藏開、又國譲卷四十一又狹衣等にも見えたり。そは四上に『手になれし扇はそれと見えながら涙にくもる色ぞことなる』とかたかなに書つけて、もとの様に置給ひつ』とあり平假字といふ名は古き物には見あたらず。こはもといづれも草書なりければ、略草といへるが平假字の事な

○かたかし。 千載物名からかみのかたさ」  
○かたかは 二巾ある物の一方を片かはと云。夫木集卅二雜、源仲正「よとゝもにえこそあにせねむかばきのかたかはもなきこひをのみして」  
○かたい 戸障子などのうごきにくきを、かたいと云。落窓物語一之下に「なが隔ての障子をあけたまふに、かたければこれあけよとのたまふに云々」

○かたぎぬ 堅木也。賴政集「あふ事は猶もかた木のきりえねば言の葉のよき何にかはせん」

○かたぎぬ 小袴 片衣也。二水記云「大永七年正月七日。早旦室町殿出仕令見物。道永以下悉以片衣小袴也。當時先無爲之間不可レ然之躰也云々。武田出仕之躰同之」とあり。片衣小袴と云こと此外にもところへ見えたり。今世の肩衣半袴の事と聞ゆ。梅窓筆記上云「今世ニ一向宗ノ徒、佛前ニ向フトテ、肩衣バカリヲ著テ袴ヲキズ。古代モ其類アリ」十訓抄廿第一「大原の聖達四五人云々。河内國石川郡にとまりにけり。家主は紺の直垂ばかりきて袴はきす。ことの外に經營してよきむしろ疊など取出してしき

けり」と見ゆ。

○かたくな 催馬樂、夏引に「かたくなにもの云をみなかな」源氏桐壺に「いと人わろうかたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなん」徒然草上八十「屏風障子などの繪も文字も、かたくなる筆やうして書たるが見にくきよりも、やどのあるじのつたなくおばゆる也」などありて。むかしも今も云詞也。按に、かたは俗にかたいきなど云偏、くなは續紀十九詔詞に「惡逆在奴久奈多夫禮」とある久奈にて、もとは偏腐の意なるべし。今も一方に腐付など云ことあると同じ。奈と多と親しく通ふ事は、雅語部に往々いひつるが如し。字鏡に「恨恨加太久奈」とあるを考ふべし。

○かたぐるし 俗に云は片心に苦しき意也。それも片泣など云例有べし。蜻蛉日記上「またおなじ晦日にある所に賀茂おなじやうにてまうでけり。二はさみづゝ下のに「さか木葉のときはかきはにゆふしでやかたぐるしなるめな見せそ神」

○かたこと 小兒のいひはじめにもいひ、又かすめて云詞をいへり。しのびね上「わが君は日にそ

へてうつくくなり給ひて、かた言うちませてものへたまふ」遊京日記上「ことなる人かたことなどするほどに」源氏薄雲「かた言のこゑはいとうつくしうて云々」明石姫君を云也袖中抄十二「よろづの所の名をかたことのやうにいふなり」

○かたじけなし 散木集六、聖衆俱會樂「かけまくもかしこき法のひじりとや、かたじけなくもひざをまじへん」西行と云傳へて、出所不知うた「何事のおはしますかはしらねどもかたじけなさになみだこばる」紫式部集「心あてにあなかたじけなこけむせる佛のみかほそとは見えねど」續紀宣命に「かたじけなみかしこみ」又「かたじけなみはづかしみ又「うむかしみかたじけなみ」又「はづかし辱し」又「かたじけなみいそしみ」などあり。詔詞解一四十六云「俗言におそれ多い物体ないと云意也」とあり。今案に、あまりに有がたいに付て、わが身の辱しく恐れ多くなる意の詞也。

○かたすみ 片隅也。今物語に「東山のかたすみにあはれに人もかけみぬ云云」

○かたすまけず 實方朝臣集、連歌「かたすま

けずの花のうへの露」「すまひ草あはする人のなければや」

○かただより

新撰六帖三、信實朝臣「はまなかに鹽かせばかりおとづれてかたよりなき海人の

やどかな」

○かたちをやづす

めくばせ 伊勢物語に

『昔ことなる事なくて尼になれる人有けり。かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけん。かもの祭見に出たりけるを、男うたよみてやる「世をうみのあまとし人を見るからにめくばせよともたのまる、かな』

○かたて 片手也。爲忠朝臣集「春くればかたのゝ原のすみれぐさ摘しかた手につばなぬくなり」又源氏物語などに、かたてといひて、相手の意なるもあり。

○かたとき 半時也。藤原元真集「こゝろをぞならはしものと思なれどかた時のまもえやはわするゝ」

○かたなき 「したなき」を見よ。

○かたなびき 新撰六帖二、民部卿爲家「秋に

あへる山だのほだちふく風になどて心のかたなびきなる」

○かたなり

片成也。万葉九五十〔三〕に「八年兒之片生乃時從云云」これは小兒に云るなれど、何事の上

にいふも同じこと也。今世にては多く藝術などの未熟の方に云り。

○かたねぶり

ひたひ 金葉集、戀下「あふことはかたねぶりなる磯ひたひひねりふすともかひやなからん」

○かたはし

片端也。夫木集卅六雜、定家「秋の夜をむしのなくなくうらむともつきじおもひの露のかたはし」拾遺雜賀、よみ人しらず「あともなきかつらぎ山のふみ、ればわがわたしこしかたはしきもし」これは橋にいひよせたり。

○かたはら

傍也。賴政集「出にけりあたの大野のわさす、きまたかたはらのことはなもがな」源氏紅葉賀「花のかたはらのみ山木なり」

○かたはらいたい 傍也。賴政集「世俗にこれを片腹痛と書

て、其意とおもふめるは非也。古本今昔物語に、ところぐガタハライダシ傍痛とかけるごとくに、其ふるまひを傍

らより見るめの痛くきのとくなるにて、俗言に傍目

笑止やといふ意の詞也。源氏桐壇に「弘徽殿には云々。この比の御けしきを見奉るうへ人女房など、かたはらいたしときへけり」

○かたひく 方引也。榮華物語歌合「うれしきはもろやのみかはあづさ弓きみもかたひくこゝろありけり」枕冊子「はしたなきもの、男も女もけぢかき人をかたひき思ふ人の云々」落雀一上「女を思へばいたくかたひくとわらひ給ふ」十六夜日記「いのるぞよわがおもふことなるみがたがたひくしほも神のまに／＼など有。今俗にはかた最負と云り。

但しかたは方人になりて、最負するよし也。

○かたまくり 爲忠朝臣集「人すまぬあれやの軒にはふむぐらかたまくりする秋の夕風」

○かたまる 土などの堅くなるを云。古今集、

雜駄長歌、凡河内躬恒「こきちらし畳みだれて霜こほりいやかたまれる庭の面にむら／＼見ゆる云々」

○かたむすび

俊頼「あしのやのしづはた帶のかたむすび心やすくもうちとくるかな」是は片結なり。後拾遺戀一、相摸

「もろともにいつかとくべきあふことのかたむすびなるよはのしたひも」是は堅結を云やうなり。万代戀二、基俊「あふ事はかたむすびなるわざもこがゆはたのひもよいつかとくべき」飛鳥井集「けさはなほよのまの露も玉ざゝの葉分の霜のかたむすびなる」

○かたむる 軍勢を以て防ぐをもひ、又物を固くするをも云。相模集「あふさかもゆるさじとこそ思ひねの關はかたむる物としりにき」

○かため 片目也。夫木集卅四、寺、諦寺見戀、俊惠法師「をかみするかために妹が見られつゝいづらばこゝろ清水の瀧」  
同見辨

○かたよせ 今「人にかたよせらるゝ」など云ことあり。爲忠朝臣集「さみだれは朽木をながすみ山河まつおりあひてかたよせにけり」

○かたよる 片捲也。金葉集春、春宮大夫公實「あさまだき吹くる風にまかすればかたよりしける青柳の糸」

○かたゐざり 片居去也。拾遺戀一、兼盛「あふ事はかたゐざりするみどり子のたゝん月にもあは

じとやする」新撰六帖二、爲家「すてゝゆくおやし  
たふこのかたるざり世にたちかねてねこそなかる  
れ」

○かたをならぶる 長明無名抄上「今はかたをな  
らぶる大すくなからまし」濱松四「つひにかたをな  
らぶる人いできぬめり」今昔物語卅一丁「右ニモ不  
恥今モ肩ヲ並ブル者无シ」同卷廿四丁「其時ニ座主肩ヲ並  
ブル人无カリケルニ云々」

○がち 俗に鹽がち、水がちなど云がちは、多  
の意也。和名抄、木類云「周易說卦曰。其於木也爲  
堅多心。師說多心讀奈加古可選云云」と見ゆ中古の  
歌詞にも「よがれがち」「ねざめがち」などいへるも  
同意也。本は負勝の勝と同語なるべし。また古今集  
等に「雪はふりつゝ消がてにする」とよめる類は、  
消難くするよしにて別意也。此語の事は雅言部に出。

○かぢ 鍛治也。窪須佐備云「和名抄「四聲字  
苑云。鍛治打ニ金鐵爲器也。俗云鍛冶訛也云云」  
是はしたもの、治を治と書るが誤也といへるにて、  
鍛治をかぢと云が誤にはあらざるべし。かぢは鍛治  
の和名歟。古事記、應神條云「又貢上人韓鍛。名卓

素云云 舊事記五「弟鍛治師連云云」又うつば物語、  
藏開に「しろがねのこがねのかぢ二十人許」とい  
へり。又記傳八四丁云「鍛人は加奴知と訓べし」字鏡  
に「鑄加奴知」とあり。天武紀に「田中臣鍛師」と見

え、又綏靖紀にも此訓見ゆ。金打を約たる名也。  
泥は奴後にかぢと云も、此かぬちの約たるなり。和名  
抄に鍛治の字音を訛て、俗に鍛治と云よし云るは、中  
々に誤なり」と云り。今按に、和名抄の釋は、右入  
江氏の云るが如くして、たゞ段を段、治を治と誤り  
て用るを云る也。又加多之は鎔師の義にて、鑄物師  
の事也。鍛治とは同じからず。垂仁紀には鍛地とあ  
れど、是は土物を作る處を云る也。又三代實錄十八  
に「加太之」とある、是は錢を鑄を云り。彼加通と加  
太之と混じて云る處あれば、ことわる也。又書紀に  
「冶工作金者」など書たるを、カナタクミと訓たるもの  
古名にはあらじ。

○かぢ 一かぢをとる 船具に、今かぢとおぼ  
えたるものは、古語に多藝之といへり。古事記、倭  
建命段に「然今吾足不得步。成ニ當藝斯形」とある  
是也。和名抄に「唐韻云。舵字亦正く船木也。楊氏

漢語抄云。柁船尾也。或作柁。和語云。多伊之。今按。舟人呼。捩抄爲舵師。是也。とある。多伊之は即右の多藝之の音便也。又歌によめる物は、今世に云櫓の事也。いつの比より此名を取たがへけん。さて今俗に人の心をとり、よく和睦するやうに孰はからふわざを、かちをとると云めるは、かの船尾に屬たる柁の、よく正船かたより譬へたる辭也。

○かちをとる 「かち」を見よ。

○かちん 餅を、かちんと云は、搗飯を急語に唱へて約れるなるべし。搗とは、杵して春をいひて、搗栗、搗稻などの搗に同じ。近昔の俗説に歌よむ貨に餅を與へたるより、歌賃と云などいへるは戯作の妄誕なり。

○かつかう 俗に格好と書て物の形容をかつかうがよいなど云は、本かほと云ことの音便に延たるなるべし。神代紀下に「有一貴客骨法非常。若從天降者當有天垢。從地來者當有地垢」とある、かくさま云る加保は、只面のみならず、容貌容體の字をもかほとよめる如く、今云かつかうによく當れり。万葉集に「果鳥」とも「容鳥」とも書て、かほとり

とよみたる、其鳥を後世かつかう鳥と呼も、かほと云直音を音便にかつかうと云る、是と同例なり。

○かつぎ 京大坂邊にて、さるべき身がらの婦人は、かつぎといふ衣を着るあり。かづけ物と云を思へば、つもじを濁るべき言のやうなるに、さを濁り習へるさまに見ゆ。此衣、江戸にても昔は著たりと見えて、我家にもたる古き芝居の繪巻物に其圖出たり。さてこは古への襲の遺風なるべし。古事記上八千矛神の御婚の御歌に「たちがをもいまだとかすて於湊比遠母いまだとかねば云々」中巻、美夜受比賣歌に「和賀祁勢流意湊比能湊蘇爾云々」下巻、女鳥王歌に「波夜夫佐和氣能美於湊比賀泥」万葉三七丁大伴坂上郎女祭神歌に「手弱女之押日取懸云々」大神宮式御裝束中に「帛意湊比八條長二丈五尺廣二幅」とあり。襲著の約れるなるべし。奈良の古院の屏風の繪に、婦人の白絹にて顔より始て、姿をつゝみ隠したるあり。是襲を著たるならんといへり。中昔にはきぬかつぎといへり。そはき部に引を見合すべし。

○かづく 肩に物を揚持をかつぐと云は、小原女が薪を戴など云方より轉り、又薪を戴くを云は、

海人が海水を潛方より轉じたるにやあらん。水中に沈むと、頭に物を戴とは、うらうへのたがひなるやうなれども、水に沒も共に頭を衝入るにて、頭衝の義なれば、終に同じ意に落ぬべし。古事記、應神段に「加豆岐伊岐豆岐」万葉四「いせのあまがあさな夕にかづくとふあはびの貝の片思ひにして」また「には鳥の潜池水云々」此外二二十三二十六六丁十九丁又二十七丁十九又三十等に見ゆ。和名抄に「本朝式云。伊勢國等潛女豆岐女」と見ゆ。さて藤原爲忠朝臣集に「おもはすもしきつの浦に時雨して織いなむしろかづくたび人」是は頭にあぐるをかつぐといへるなり。

○かづける 今俗に我がせぬ事を、人のわれにおふせて云を、われにかづけると云是也。こは雅言のかこつゝ又かごとなど云と、本一つなり。そのかことは借言にて、借言附とも云を、雅俗互に省きていひならへる也。古今集序「それまろらがことば、春の花のにはひすくなくして、むなしき名のみ秋の夜の長きをかこてれば」惠慶集、にはの梅「しら雪のふるとしながら庭の梅は花とかこちてにはひやは

せん」千載集戀、西行「なげゝとて月やは物を思はするかこちがほなるわがなみだかな」白氏文集卅一筆詩「猿苦嫌レ月。戀嬌語記レ風」など見ゆ。又かごといへるは、紀貫之集一「山田さへ今はつくるをちる花のかごとは風におふせざらん」後撰集十一戀三「した紐のしるしとするもとけなくにかたるかごとはあらすも有かな」源氏桐壺に「命婦えものりやらず「いとゝしく虫のねしげきあさぢふに露おさそふる雲の上人」かごとも聞えづべくなんといはせ給ふ又是をことづくるともいへど、こには省けり。  
○渴しても盜泉の水をのます 文選、樂府、猛虎行陸士衡「渴不飲盜泉水。熱不息惡木陰。木豈無枝。志士多苦心」  
○かつたる 倪言にかつたると云は、かつたるの音便也。又それを癱病者の事として云は轉せる也。此意を考るに、神武紀に「磐余之地。舊名片居片居此云伽略委亦曰二片立一片立此云伽略々知」とあるは、其地の嶮岨なる狀を云るなれど、此と同意にて、偏坐の義なるべし。こは跛、躄、癱者の屬は正直にをる事能はずして、偏て坐ば也。さて和名抄に乞兒を加多

爲と訓たるは、乞食には昔よりさる病者かたはもの  
へ多かるより轉れるなり。こを又今の俗に、人を詈  
り貶しむるかたにもいへる、土佐日記に「此かぢと  
りは日を得はからぬかたゐなりけり」と云るがごと  
し。

○かつたるい 「だるい」を見よ。

○かつて カツテ 舌也。此言平言に云と、漢籍の訓に  
遺れるのみにて、中古後の歌にはをさく見えざれ  
ば、文詞に用るすらからめくこゝちせらるゝやうな  
れど、古語也。古事記、明宮段に「都不カナヲ 知執械而  
立船」タケアマ、皇極卷に「取常世虫求福棄捨珍財  
都無所」タケアマ、此外紀中に、都字をカツテとも、フツニと  
も訓、曾字をも訓たり。万葉四四十に「花勝見都毛不  
知戀哀招可聞」タケアマ、十九に「木高者曾木不殖」タケアマ、二十一  
に「名は曾のらじ」タケアマ、十三二十四に「戀とふものは都而や  
まずけり」など多くよみたり。

○かつば 「はおり」を見よ。

○かつば 「かもじ」を見よ。  
○かつぶし 「なまりぶし」 にだし 鰹節

は堅魚乾の音轉なるべし。音通ヘリ 又其生乾なるを生

節と云も、生乾の意と聞ゆ。此生節を東國の俚言に  
なまりぶしと云、是も生煎乾の省きなるべし。生は  
何れも不熟の意なれども、通俗のまゝにかく也。さ  
てかつをと云名はもと堅魚の約れる言にて、煎乾た  
る上の名なりけんが、後に生魚の名の方にも轉れり  
しにや。古事記、朝倉宮段にも「有上三堅魚一作舍屋  
之家」と貞觀儀式大嘗宮下に「置五尺堅魚木八枚」  
大神宮儀式帳にも「堅魚木十枚」など借て書るも、  
皆其形の鰹節に似だるを以てなりければ、鰹節は古  
へ今も同じかりし事しるべし。然るに和名抄に「唐  
韻云。鰹大鯛也云云。漢語抄云。加豆乎。式文用ニ堅  
魚二字」とあるは謬れるにこそ。鰹字は漢國にては  
鱈なり。此間にては堅魚二合の字なるをや。かくて  
此魚を堅魚に造りて、醬に用ひし事の古き事は、右  
の古事記等にて見べし。和名抄鹽梅類に「本朝式云。  
堅魚煎汁加豆乎以呂利」とある、是今之煮出なり。  
異邦より皇朝を指て調査に委き國也と稱へたるも、  
うべにざりける。

○かて かりて カれひ 程也。竹取物語  
に「あるときはかてつきて、草のねをくひものとし」

和名抄に「考聲切韻云。糧<sup>ハ</sup>字亦<sup>根</sup>旅行所<sup>ハ</sup>賣米也。又云。儲食也。和名加天」とあり。今も此二つに云り。万葉五に「都禰斯良農道乃長手袁久禮久禮等伊可爾迦由迦牟可利豆波奈斯爾。一云。可例比波奈之爾」とあり。本居氏云「可利豆は加禮比豆の約りたる也。禮比は利加禮比豆とは、加禮比の料と云意なり。加禮比と切る。」加禮比豆とは、加禮比の料と云意なり。加禮比豆は加禮比の價と云意には非ず。加豆は加利豆の利を省けるなれば此も同く、加禮比豆なり。其より轉りて、必しも乾たるならざれども、旅にて食ふ飯をば加禮比と云なり。古今集部詞書に「但馬國の湯へまかりける時に、二見浦と云所にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに云云」伊勢物語に「其澤のはとりの木の陰におりて、かれいひくひけりなどあり」といへり。今按に、加利豆は糧代にて、其代を云なれば、其料の米は勿論、其價をも云、ひろくは宿賃をも云べし。價を代と云は、菅家万葉「沓代」新猿樂記「酒代」など云るが如し。又天皇のきこしをすをば朝餉と稱すなどは、輕飯の義也。この事は雅言の部に委く云り。其となへ同じと

て混ふべからず。又加豆は加利豆とは別にて、食當の義の言也。又合を訓も、元より別也。そは合飯の條に出。

○かてめし 「でうもく」を見よ。

○かてめし 今邊土の民屋に米麥の中へ、菜、大根葉、芋葉、何くれの物を加へて煮たるを、かてめしと云。こは農民の糧の意かとも思しに、合飯の義にて、物と物と相合せたる謂なり。伊勢集に「かくいひつゝまるり來んといふものから、えこで初雪のふる日「神な月時雨ばかりはふらすしてゆきがてのみなどなるらん」かへし「ゆきませて見べきものかは神な月時雨に袖の濡も社すれしにも出たり」此うた後撰冬夫木一一、延喜三年三月廿七日、京極御息所歌合に、初春よみ入しらず「雪がてにふく春風ははやけれど春山なればさむからなく」これらの雪がては雪合の意に心づかずば解あやまるべし。古事記應神段に「取ニ其河石<sup>カニ</sup>合レ鹽而裹ニ其竹葉<sup>アシキ</sup>」万葉十六十八に「下シシヌスレ爾蒜都伎合而」とあり。即<sup>アシキ</sup>塗の阿闍と同意の古言也。人名に和字を加都とよむも是也。加受と心得ては本義を失ふべし。和名抄に「餌飯、唐韻云。餌女教反。

字亦作「釋」。和名加之木可天 雜飯也」とあり。

○かどはす かどふ 勾引

後撰集二、春

中「寛平の御時、花の色霞にこめて見せずともといふ心をよみて奉れとおほせられければ、藤原興風「山風の花の香かどふふもとには春の霞をほだしなりける」白氏文集廿一楊柳枝詞等「依々嫋々復青々。勾引

春風無限情。白雪花繁空摸地。線絲條弱不勝鬱」

○かどび おに火 或説云「今婚禮の出輿の

時、其家の門にて火をたき、又出棺の時鬼火とてたくも、神代紀、天岩屋戸條の「火處燒庭燎」等の遺風なるべし。外國の書に、皇朝の風俗を記して云「婦入夫家必先跨火乃與夫相見」と見えたり。是を送葬に準へたりと云は、後の暗推なり」といへり。

○かどふ 「かどはす」を見よ。

○かどまつ 新勅撰七、前關白「はつ春の花のみやこに松をうゑて民のとどめる千代ぞしらるゝ」堀川百首、除夜、顯季「門松をいとなみたつるそのほどに春明がたによやなりのらん」林葉集六「正月三日、人のもとにまかりたりしかば、中門に松をたていはれしに、うたよめと侍りしかば「春にあへ

る此かど松をわけきつゝわれも千代へむうちに入ねる」此外拾遺員外上、拾玉集四八山家集上等にもある。また出たれど、引にも及ばぬわざ也。さて世話問答上曰「問て云、朔日よりしづが家ゐに門の松とてたて侍るはいつ比より始れる事ぞや。答、いつ比とは慥に申しがたし。門の松たつる事は、昔よりあり來れる事なるべし。賤が家ゐは大方方戸なるに依て、民と申侍れど、むかしは一町の内を五丈づゝにわりて門を立しかば、入の門ありしなり。其中に賤が家ゐをつくり侍れば、門なかるべきにあらず。その門の前に松竹をたて侍り。松は千とせを契り、竹は万代をかぎる草なれば、としの始のいはひ事にたて侍るべし。またしだ、ゆづり葉は深山にありて、雪霜にもしをれぬ物なれば、しめ縄にかざりて同じくひき侍るにや」上窪のすさびに云「鳥丸家聞書云。當春禁中の門松をよみ給ひしが、門松は禁中にも仙洞にもなき事なり。職の家にもなき事也。大路の門松は民家の事なりとの給ひし云々」今按に、長明四季物語十二月の段云「やはた松の尾よりかざり竹奉りければ、矢瀬大はらの民ぐさ、じりくめ縄こしらへて

つかうまつれば、とのもづかさ、をさめどの、づかさなどは、ことしはあらへしうつとめの。なぢらが身あさましかりぬべしなどいひのゝしるよ。松はいつもみあれ山より奉れり。松竹を立らるゝ事は、きんめいの御代よりはじめさせ給へり。松は千とせのよはひをたもち、竹はみどりのみさを、あらはし、節文をそなへて禮にかなへれば、年の始に立つかうまつらせ給へり云々」藏玉集に「もゝしきの山の初代草」とよめるも、大内に植し門松の事なりといへり。これらを見るに、いにしへ禁中に門松たてられし事勿論なり。いにしへありきてふ公事の、今はたえてなきも歌によむ事多きをや。

○かどや 門屋 角屋也。夫木卅五雜、信實朝臣「ふなよせのきしのうへなるかどやよりあやしや妹が見えかくれる」又「よめはうらやよりとれ、聾はかどやよりもへ」と云諺は、門家の意にて、門構への家よりと云意なるべし。  
○かなきばろ 槍屑也。武藏國埼玉郡柏壁と云。郷の邊にて、小木薪等の伐屑割屑をかなきばろと云。これ古語の遺れる也。かな木は小木のよび名にて、

**肘木**の謂なる事、雅言部の楷條に詳く出。孝德紀の歌に「阿娜紀都該阿我柯賦古麻播」大祓詞に「天津金木乎本打切末打斷氏」齊明紀に「以ノ培戰」とあるも、若木を棒として打合たる也。

○かなぐる 徒然草上六段「岡本關白殿云々。雨おほひの毛をすこしかなぐりちらし云々」今も物を引かなぐるなど云り。こは肘抛と云ことの中略なるべし。舞の手にかなぐると云も、肘撫の略なるより云て、それと似たれば也。

○金澤文庫 北條九代記十二「北條修理大夫貞顯の子越後守實時は、金澤に居住す。後に稱名寺とぞ號ける。その子越後守顯時より金澤を家號とし、稱名寺の内に文庫を立て、和漢の群書を集められ、内外兩典諸史百家醫陰神歌世に有ほどの書典には残る所なく、金澤文庫といふ印をこしらへ、儒書には黒印、佛書には朱印、卷毎に押れたり。讀書講學望ある輩は、貴賤道俗立籠りて學問を勤めたり。金澤の學校とて舊跡今も残りたり。越後守顯時は文武の學り學業のつとめ怠らす。作文詩章には當時に名を得

し人なりければ執權の職に居しても耻しからずとぞ  
聞えける云々」

○かなたくみ 新撰六帖五、信實朝臣「かつは  
又さすさやくちにあふびへは心ありけるかなたくみ  
かな」

○かなづる 舞かなづるは舞に手して物を撫る

が如きふるまひして動はしさたらかするを云て、卽  
肘撫の中略なるべし。肘磨也と云說あれど、さて  
は假字達へり。いかゞ。さて此かなづと云に乙字を  
書ならへるは、かなづる時の肘の形にとりて假たる  
也といへり。古本神樂、其駒歌左に「此歌時人長立  
・座天必加奈豆湧」と見え、體源抄に多く乙字を用ひ  
たり。大神景通家日記云「早歌韓神聞人長乙」また恒  
方云「かなでは歌毎に有之。而近代は不舞之也。  
只上拍子は韓神と其駒とにかなづる也。歌の心を舞  
也云々。今世にも度々折て興あらん時は、必乙べき  
なり。また乙肘も踏足も、方角をすごす事をせぬ  
なり」とあり。

○かなはぬ 讀岐入道集「こゝろにもかなはぬ  
ものは涙かなわがためつらき人とする」拾遺集

雜下「あし引の山のこでらにすむ人はわがいふこと  
もかなはざりけり」

○かなふ 古今集、離別「いのちだに心にかな  
ふものならば何かわかれのかなしからまし」頼政集  
「おもふ事下にもまるゝまろすゝの露ばかりだにか  
なはましかば」

○かなへなる 鼎鳴也。書紀、天智卷云「天皇

十年崩。是歲大炊省有三八鼎鳴。或一鼎鳴。或二或  
三俱鳴。或八俱鳴」と見ゆ。今世に釜の鳴を不祥と  
するは、その所由ある歟。吉備神社の御釜の鳴事は、  
神靈なれば別とすべし。行囊抄に「舊記云。吉備津  
宮裏有三釜。常有三新事。巫人燐湯。而浸三竹葉。以  
灌身。又詣神者欲試事。奠粢盛于釜前。祝福畢。  
燃柴則釜鳴如牛聲。卽吉。不鳴則凶云々。長嘯九  
州紀行云「その夜は神主の家にとまりぬ云々。火た  
きやには釜ふたつを並べておさたりける。其釜ひ  
とつ神供を調ぶる毎に、おびたゞしくなりとよむよ  
しを聞いて、のぞみ侍りけるに、まことにいかづちな  
どのさまに、しばしとよろきて聞えけり。これぞ神  
となんいひつたへし」

○かなべら 鐵 たかへら 竹刀 へらす  
へぐ へらは稗平の約れるなるべし。古事記、

中、神武御歌に「久治良佐夜流云々。許紀志斐惠泥」  
また「許紀陀斐惠泥」とある斐惠是也。禮記禮運に

「稗豚、注摩<sup>ミタマ</sup>析豚肉<sup>ミツク</sup>也」また、少儀に「牛與<sup>ミ</sup>羊魚<sup>ミ</sup>  
之腥。茹而切<sup>ミ</sup>之爲<sup>ミ</sup>膾」字書に「茹は脣膾と同様。  
薄<sup>ミ</sup>切肉<sup>ミ</sup>」とあり。此等のヒエはへと約れり。又へ

ぐ、へらすといふ言も、右のへらより出たるにや。  
へらは則物を薄<sup>ミ</sup>切取て減す具なれば也。又鐵を和名

抄に、かなふぐしと訓るを見れば、萬葉集<sup>ミクニ</sup>の初葉  
なる布具志も、掘串のことにはあらじ。猶稗串の義  
なるべし。又和名抄に、竹刀を阿乎比衣とある阿字  
は、竹のよしにて、比衣は比惠を誤れる也。神代記

下卷なる竹刀をもアヲヒエと訓むべき也。

○かなめ 扇のかなめと云物は、蟹の目に似た  
るより云なるべし。源太府集に『うちにて大夫のす  
けのあふぎのかのめかためて、とくつかはすとて「か  
にのめのはなる、たびにいとくしく君が心のうしろ  
めたさよ』とあるにて、然か聞えたり。又要の字を  
よみて、物の専要なるを云も、かなめ解れば扇みだ

る、故に云か。但しかなめとかためと普通へば、堅  
めのよしなるも知がたし。然る時は右の歌はたゞ見  
立てよめるなり。

○かなり八合 佗山石初編乾「世の俚諺にかな  
り八合と云事あり。或人の此かなりと云文字を問け  
るに、答て云。これはおもふに經史の中に、許可の  
文奇に可也とある、此二字にてあるべし。蓋其昔に  
經史等に可也とある所を、儒師の演説時に可也とは  
許所の詞なりとはいへども、これは十分の位にはあ  
らずして、わづかに八合ばかりの義也と說聞せつる  
より可也は八合ばかりの義也と諸生等がいひ傳へし  
より、弘れる諺なるべしとこたへけるが、是も又穿  
鑿の強説かしらす」

○がなる がやく 此近邊りの、埼玉郡、  
葛飾郡邊にて喧しく物云を、がなると云り。初言を  
濁るは俗言なれども、言は元よりの古語なり。萬葉  
十四に「あしがらのをてもこのもにさす絹の可奈流<sup>カナフ</sup>  
ましづみころあれ紐とく」又廿に「あらしをのいほ  
箭手挟み立向ひ可奈流ましづみいで、ぞあがくる」  
などよみたり。又がやくと、さうぐしと云も「筑

波嶺にかゞなく然の」とよみ、かゞに通へり。加は皆囂カニビスし喧カニシましなど云加に同じき也。次の言をも合せ考ふべし。

○かね 彼とは是とを相兼たるを云は常なれど、こゝは「き、かねて」「たへかねて」など云かね也。

古事記、遠飛鳥宮段に「不<sup>レ</sup>堪<sup>ニ</sup>戀慕<sup>ニ</sup>而」と書て、オモヒカネテと訓たり。此字の意也。万葉十一ア丁に「山科のこはたの山を馬はあれどかちゆわれ來ナキチヨミ汝念不得」とかきたる、此不得の字も又同じ。

○かね 印牧氏 燒印をかねと云て、今も馬の足を療治するに用ふる燒鐵をかねとのみ云は、昔の稱の遺れる也。古へは和漢ともに、野牧の馬に焼

印を捺事ありき。其火印をもはらかねと云う。今も世に印牧と書いて、かねまきと訓る地名も、人の氏も、

をり／＼あり。其はもとその馬を主る牧士の氏ども又其地の名ともなりしにこそ。沙石集二上云「鎌倉

に町の局とやらん聞えし德人有けり。近く仕ふ女童云々。錢を赤く焼て、片頬にあてゝけり。よく／＼見るに、かね焼にしつる錢の形、顔のほどにあたりて見えけり云々。當時もかの佛おはしますかなやき

佛と申あひたり

○かねのうへの露 空穂、只社に「ちから人あつまりてわるに、いさゝかなるきすもつかず。かねのうへに露かゝらんばかりなり」

○かねまき氏 「かね」を見よ。

○かねをつくる 海人藻芥云「凡彼御代鳥羽已前は男の眉の毛をぬき、髪をはさみ、金をつくること一切無<sup>レ</sup>之。及<sup>ニ</sup>末代<sup>ニ</sup>毎度矯飾の至也」とある、これらの事に付て委き考へあり。千代の古道に出づ。

○かねをほる なまり 賴政集「みちのくのかねをばこひてほるまなく妹がなまりのわすられぬかな」

○かねをゆる 夫木集十四、秋、法印靜賢「かはなみのこがねをゆると見えつるはきしなる菊のあらふなりけり」

○可の字をそふ 四季談四月「内のしるすつかさ紅の帯して、てうじて宣命を内侍のかみにつたへ侍れば、主上御ゆするをへさせ給ひて、御手づからひらかせよみおはして、可の字を御手づからそへさせ給へば云々」

○かはご 皮子也。體源抄に「簾簾」の名物をい

へる中に「皮子丸は、延喜御門の御時、唐よりもろくの重寶を入れ奉られたりける、皮子の足に立たる竹管のよきほどなりければ、とりて彫たりける、

最上の物なりける也。當時傳はりて、宇治の寶藏にあり」といへり。皮子と云物の名いと古かり。

○かばしら 蚊柱也。拾遺恩草上「くさぶかきしづがふせやの蚊ばしらにいとふけぶりをたてそむるかな」

○かはせみ 「そな」を見よ。

○蛙はくちから 清輔集に「女をうらみて、今ははじとちかごとたてゝのち、もとよりけに戀しかりければあをきすぢある瓜にてかへるのかたをつくりて、書付てやりける「ちかひしを思ひかへるの入しれず口から物をおもふ比かな」

○かはつるみ 太秦牛祭祭文に「鐘樓法華堂乃

加波津留美」

○かはばこ 皮箱也。箱に皮を張事も古き時よりのわざなりけん。万葉十六三十「吾皮は御箱の皮」とよみたり。

○かはや まる おかは 厕也。和名抄、

居宅類に「釋名云。廁音四反。和名加波夜」とあり。こ

は万葉十六十八に「川隈乃屎鮒喫有痛女奴」とよみた

る如く、古へは小川に架をかけ置て、送糞の處に、

川屋とは云。今世に老人小兒などの屎をとる器を、

おかはと云も、川屋の川にて、即御廁の意也。又其

同じ物をおまと云も、屎を送器なる故に云也。神

代紀に「送糞此云俱蘇摩屢」ありて、万葉十六十八

に「屎遠麻禮」竹取物語に「燕の麻理置るふる屎」など

云るが如し。又婆流とも云は、麻と婆と親しく通ふ

が故也。今も寝小便する者を、夜つ婆理すると云が

如し。

○かはやき 「でんがく」を見よ。

○かはゆき 舊本今昔物語廿六云「後手ノ髪ノタブ」トシテ可咲氣ナルヲ見ルニ、カハユク中略

此見ニ刀ヲ突立、箭ヲ射立テ殺サンハ、尙カハユシ

又廿九に「極ジカハユク候フコトナレドモ云云。

糸皮ユキコトニテ候ヘバ云々」今物語信實朝に「かは

ゆき事を見つるよとかなしくて」撰集抄に「法勝寺の邊にかはゆげなる乞食にきものをぬぎくれて」中

務内侍日記に「世にふれば何となくわすれぬふし

く多く、袖もぬれぬべきことわりもしらるゝこ

そかはゆくおぼゆれど云々」盛衰記卷五「昨日迄モ

面ヲ向へ、肩ヲ並べシ卿相ナリ。眼前ニ縄付ル事ハ

カハユクモ被思ケル云々」此外いと多く見ゆ。かく

古くより云るを見れば、可愛の字音にはあらで、此

間の言なるべし。凡てはゆしと言は、堪にくき事に

云て「まばゆし」「かゝはゆし」俗にも「こそばゆし」

など云を合せて考ふべし。

○かはらけ 瓦器にて、何にても瓦もて作りた

るを云て、土器の物名の如くなれど、もはら土焼盃

をいへり。橘爲仲朝臣集「三月三日、盃山浮水流と云

題を「小波にながれてくるかはらけは花のかけに

もくもらざりけり」此歌はかはらけには非ず。さか

づきとよむべくぞおぼゆる。下にくもらすとあれば

也。

○かはらや つちくれ 金葉雜下「かはら屋

を見て、よみ人しらず「かはらやのいたぶきにても

見ゆるかな」助成(イ助像)「つちくれしてやつくりぞめ

けん」夫木集卅雜家隆「かはらやのしたゝく人もこ

ひわびぬさらばあさまのけぶりともなれ

○かひ 「しりがい」を見よ。

○かひあはせ一 夫木廿五雜、西行、「いまぞしる

ふたみのうらのはまぐりをかひあはせとておほふな

りけり」

○かひおほひ 手まり らんこ 貝覆也。

明月記「元仁二年乙酉三月十四日。朝天陰。巳時入

夜。中將來談。十二日。於北山邊淵醉云々。十二日

夕。幕下被參安嘉門院。女房聊日來經營事被出、貝掩

事云々。花瓶立。色々花立。地盤。其下入扇五十薄

様等云々」乳母冊子「御貞めし出され候はゝ、まづ

左をもちて參り、後に右を參らせ候。御貞うつして

二かたへわけて、くちにしきを十二にても、おほき

ならば十にても、げにくくちひろくば、八もたて

申候。それもなかに貝の居候はんほどを御覽じて、

あはせ候へし。ちひさきは十六もたて候はんにせぬ

事にて候。出し候事はちとさかりたるやうなるが、

すゞましんしやくせぬ事にて候。さて出し候へと

ある時、貝を手のうちにもちていただすべし。うへと

ある人の御方へかしらをむけて出すべし。うへに御

あはせ候はんほどまちまゐらせて出すべし。又しも  
の人おほひ候はい、やがて出し候べし。上をまたせ申  
さぬかどにて候。めしつかふ人に御をしへ候へ。み  
やづかへの人しつけ候はねば、御うへに物をしろし  
めされぬになり候べし」四十二の物争「かひおほひ  
と手まりと、后宮のおほ宮「黒かみのみだれてさわぐ  
まりよりも貝におほへる袖ぞなつかし」大鏡に「ら  
んご、貝おほひ」源平盛衰記五 多田藏人行綱中言之  
條「五月廿日、西八條へ推參してみれば、馬車數も  
しれず集りたり。藏人何事やらんとおもひて尋問け  
れば、案内者とおばしくて答けるは、入道殿福原御  
下向の御留守に、君達會合して貝覆の御勝負也」と云

へり。和名抄には「太々牟伎」また「比知」などあり  
て、此名見えず。又字鏡には、臂を、「加比奈」とも  
「太々牟伎」ともありて、加比奈とは多々牟伎の弱名  
也。されば倭建命御歌に、美夜受比賣の御手を「比  
波煩曾多和夜賀比那遠」とよませ給ひたり。按に、  
肘の屈信するより云名にて、殊に女の臂のかよわき  
をむねと云て、男には宇天と分て云しさまに見ゆ。  
今世に物の支などの弱げなるを、かひないと云、又  
生つきのひはづにして弱々しげなるをも、生つきか  
ひなくてなど云。本同語なる故也。又中古に懦弱な  
るをいふかひなしと云も、同語なり。

○かひな かひない いふがひなし  
字鏡に「肱臂也。加比奈」万葉三四十「木綿手次可  
比奈爾懸而云々」此外にも加比那てふことは、歌に  
も、詞にも、あまた見えた。大かたは女の手にい  
にかひくしき御ありさま也」

○かひな かひない いふがひなし  
○株 「かぶく」を見よ。  
○株 「かぶく」買也。空穗、藤原君三四條「わたりに  
大きな殿、かはれて、たからをつくしてつくる云々」  
易代る方より云語也。忠岑集に「君が爲命かひへぞ  
われはゆく鶴てふこほり千代をうる也」

○かひな かひない いふがひなし  
字鏡に「肱臂也。加比奈」万葉三四十「木綿手次可  
比奈爾懸而云々」此外にも加比那てふことは、歌に  
も、詞にも、あまた見えた。大かたは女の手にい  
にかひくしき御ありさま也」

○株 「かぶく」見よ。  
○株 「かぶく」類かぶし 大かぶし かぶく  
株 蕉根 鎮箭 小兒の首を振をかぶく  
する」と云は、古語の不須頗傾のなごり也。神代紀一

書に「彼地未平矣。不須頗頗凶目杵之國歟。云々」此頗傾の字は、傾け振よし以て書る也。又首をかぶと云は頭槌などの如し。ゐなかには今もかぶと云古語遺りて「頬かぶしがわるい」などいひ、又大なる顔する人を「大かぶしにかまへて」なども云。又所によりては大祿の人を「大かぶし」とも云。こは大株の意かとも思ふやうなれど、それもいひもてゆけばおなじ事におつめり。又鳥居の屋などの上重く傾くをば、かぶくといひ、大輪の菊牡丹等の花などの傾くをもいへり。又蕪根を云も首の頭より出たる也。頭槌の名は又其蕪根より移して云也。木の株なども同例の稱也。神代紀に「頭槌此云箇輔豆智」又神武紀に、「頭椎劍」と有て、うたには久夫都々伊とうたへり。神功紀の歌にも句夫菟智とあり。私記に「頭槌劍名。其頭曲」纂疏に「頭槌者劍槌首如槌也。今隼人所帶之劍有此形也」と云り。これらは後に柄の形のいさゝか反たるがあるに付て思ひ准へられる説なれども、曲りたるにあらざる事、稜威言別に辨へたるが如し。近いいは、今俗に云如く、大頭なるよりいへる稱なり。

○かぶき　歌舞伎也。日本後紀十九「桓武天皇延暦十八年秋七月癸卯朔云云。己酉停伊勢齋宮新嘗會。但以歌舞伎供九月祭」類聚國史四、神祇部四、伊勢齋宮條下にも此事見ゆ。又「天長九年夏四月丁丑。皇帝御南殿。左衛門及左兵衛府獻物。音樂迭奏。歌舞妓閑。群臣飽醉。不知手舞足踏。賜侍從已上衣被」と見えて、古き稱也。後世芝居狂言の歌舞伎と云ものも、其名は此うたまひの伎より傳へたる也。其等の事は、既に上の於部於國歌舞伎の條にも出し、下にも幾所にもきざみく出すべし。  
○かぶく　俗に物の下より上の勝て傾くを、かぶくと云。又稻穂、粟穂等の實のりて傾くをも云ることあり。古事記上、八千矛神の御歌「宇那加夫斯那賀那加佐麻久」書紀神代卷に「頗傾此云歌舞矛志」とある是也。古く助辭の麻之を麻久とも云るに同じ。又後世門の名にかぶき門と云あるも、上の勝たるを以て云歟。是は別なる歟、定めがたし。(猶「かぶく」を參照せよ。)  
○かぶと人形　これを端午に飾る事久しき事

也。延喜式卷四十一「彈正式曰。凡金銀薄泥不得爲服用并雜器飾。但五月五日。諸衛府中胄之飾不<sub>レ</sub>在制限」と見ゆ。なほ續後紀十一十三の文を見合すべし。甚嚴重に美をつくせしわざと見えたり。こは神功皇后韓國御征伐の比より、御凱陣の吉瑞を傳へたるならはしなる事、懺の條に云べし。

○かぶらね

「かぶく」を見よ。

○かぶらや

「かぶく」を見よ。

○かぶろ

禿也。四季物語鷗長明、四月賀茂祭條

云、「曉がたよりまづ宮居にその供人まで、神輿より先にうちわたり、看督のをさのよろふたるものとしをかへて、おの／＼あまた度いでたり。又花つ

みのかぶろ花がたみのわらはべ、いろ／＼にきよら

を盡し云々」夫木集卅五雜、信實朝臣「いとはしや、まだかぶろなるうなひとも、やけ野にあまたつばなぬく也」などあり。童の未髪みじかき程を云。郭中の小女を云も、是より出たる也。

○かへす

鳥の卵をあたへめて、雛になすをかへすと云。變化しむる意也。源順集に「伊勢齋宮の

云々のとき「神のます山田の原のつるの子はかへる」云々のとき「神のます山田の原のつるの子はかへる」

よりこそ千世はかぞへめ』かへるはおのづから變化を云。

○壁に馬をのりかくる

物の火急なる事に云

り。唐志七、劉禹錫辭云「其難如頻策驚進壁面」

○かべのそこ 夫木集十四、秋、殷富門院太輔

「きり／＼すくもゐのかりに何といひてかべのそこ

より聲あはすらん」

○かへりごと

「へんじ」を見よ。

○かへりしな

「しな」を見よ。

○かほくらべ

おもておこし 仲文集に「あ

が佛かほくらべせよ極樂のおもておこしをわれのみぞせん」

○かま

釜

竈也。和名抄云「竈竈附四聲字苑

云。竈則到反。與<sub>レ</sub>躁同。和名加万。炊爨處也」また釜を

かまと云も、本竈に居る器なる故の名也。かくては

紛はしきが如くなれど、繪を織る具をも同じく機と

云が如し。猶竈所の條に委く云べし。

○かまける 「世帶にかまける」「子にかまける」

など云。本は感佩する方より轉じたる言なるべし。

万葉十六九丁に「はしきやしおきながうたに、おほゝし

きこゝの、子らや蚊間毛而將居<sup>カマアマヲラス</sup> 皇極紀に、感をか  
まけと訓、又孝德紀に滅をしか訓たる、是も感の誤  
りなるべし。

○かまと へつい 久度 爐火臺<sup>ルフタツ</sup> 罷<sup>カマ</sup>を  
かまと、云も、古き事也。万葉五<sup>世</sup>丁<sup>ト</sup>に「可麻度柔播  
火氣布伎多豆受<sup>カマドヒタマス</sup>」とあり。又閑都比と云名も古し。  
神樂譜、罷殿遊歌に「止與戸川比」と見え、枕冊子に  
も「御へつひ」とあり。古語拾遺に見えたり。久度は  
罷後の穴也。和名抄に「文字集略云。罷<sup>カマ</sup>七經反 和名久  
度。罷後穿也」とあり。或書云「罷を京師南都にて  
は久度と云、江戸大坂にては閑都比、或は加万杼と  
云。近江にては呂久太伊と云、大和にては多伊倍都  
比と云加万杼は罷所の義なり。鹽竈、炭竈などやう  
に、常に加万といへり。ろくだいは爐火臺の轉語  
なるべし」といへり。かくて民戸をさして、罷所と  
云も、炊爨の尤重きが故也。日本竟宴歌に「高との  
にのぼりて見ればけぶり立民のかまどは今ぞにぎは  
ふ」空穂、藤原君二十に「えがたき女を得んとせんや  
うは、せかいにふせうと、のはず、家かまどなくし  
て、たよりなからん人、道ことにおきて云々」

○かまびすし ひよどり ねぶたげ 爲忠  
朝臣集「ながき日のしげきの枝にかまびすくなくひ  
よどりにねぶたげもなし」

○かまへ 身がまへする」「逃がまへする」な  
ど云構へなり。堀川百首、權中納言國信「かみな月  
また冬がまへせぬものをとりもあへずもあるけふ  
哉」

○かまへて わざとかまへてなど云。空穂、藏  
開「よりあきらかまへてなんはひとりてはべると申  
し給へば」

○がまん 我慢也。法華經八、勸發品廿八「此人  
爲三毒所惱。亦不爲嫉妬我慢邪慢。增上慢所惱」維  
摩經ニ方便品五左「若在婆羅門婆羅中尊。除其我慢」

○かみきりのあま 物に髪切の尼とあるは、さ  
げ尼なり。さて又のちに髪をおろして尼になるもあ  
るべし。續世繼月「長曆三年五月七日、御ぐしおろ  
させ給ふ。あさともの入道中納言「世を捨てやどを  
出にし身なれども猶戀しきはむかしなりけり」とよ  
みて、此女院へたてまつり玉へる御返事に「つかの  
まも戀しきことのなぐさまば二たび世をもそむかざ

らまし」とよませ給へるは、はじめは御ぐしそがせ給ひて、後皆おろさせ給ふ心なるべし。

○かみしも 上下也。古本今昔、寶物集、布衣

記永仁三年條に云「若黨中間跡ニ上下ヲ著召具」縣居本首書云「上下ハ即素襖ナリ」とあり。按に、今世に肩衣と袴を上下と云は、上下衣服と云べきを省きて云るなり。鎮御魂齋戸祭祝詞に「奉御衣波上下備奉豆云々」とある、此等も上とは衣を云、下とは袴をいへる也。吉部秘訓に「著ニ白兩面上下」また「著ニ赤色上下」など見え、其外の裝束抄にも或は「淺黃上下」或は「赤色上下」など云ふこと多し。皆上とは狩衣、直垂、素襖など何にまれ、上に著る服を云、下とは袴をいへる也。今の上下もそれと同じ心ばへながら、いつよりさる服の出來しと云事はきはやかにも知がたし。

○かみのた、り 後撰集雜二、枇杷左大臣「かしは木に葉守の神のましけるをしらでぞをりしたゝなりなさるな」金葉、秋、俊賴「あらじをや葉もりの神もたるらん月にもみちのたむけしてけり」万葉集にこれかれあれど今略之。

○髪の毛一すぢほども 竹取物語「いまよりのちは毛のすぢ一すぢをだにうごかしたてまつらじと」

○かみは非禮をうけす 性理字義云「神不レ歆ニ非禮不レ祀ニ非族」南秋江鬼神論云「神不レ享ニ非禮也。鬼神是理。非其理而祭レ之。必無得レ享之理云々」此外多く見えて、世俗も常に云ことなれど、皆唯理を設たる言ぐさなり。人としていかでか神の御慮を知らん。實は恐多きことゝもなり。

○かみやつこ 万代集、夏、藤原輔尹「神やつことるや何ぞも千はやぶるかものまつりにあふひ成けり」曾丹集、正月中「ひはらもるふるの社の神やつこ春來にけりとするらめやそも」

○剪レ髪 祈レ神 吕氏春秋「昔殷湯克レ夏。而大旱五年。湯乃身禱於桑林。於是剪其髮、燭其手、以身爲犧牲。用祈福於上帝。民甚說雨乃大至云云」今世の俗に神佛を祈るに、剪レ髪奉る事あり。これを見れば夷狄のわざ也。以身爲犧牲とあるなどを合て知べし。又女の身に事故ある時、髪を剪事ある、是は身を毀て其罪を禱ぐわざなれば、さもあるべき

事也。

○かめ 水瓶 花甕

古今春上に「樂どの

、后のおまへに、花かめにさくらの花をさゝせ給へ  
るを見てよめる、前のおほきおほいまうちぎみ云々」

枕草子に「おもしろく候たる櫻をながく折て、大なる花がめにさしたることをかしけれ」又「高欄のも

とに青きかめの大なるすゑて、櫻のいみじう面白き

枝に、五尺ばかりなるをいとおほくさしたれば云々」又古今雜上に「寛平の御時に、うへのさむらひ

に待けるをのことも、かめをもたせて、后の宮の御かたに、大みきのおろしと聞えに奉りたりけるを、

藏人どもわらひて、かめをおまへにもていで、ともかくもいはずなりにければ、つかひの歸りきて、

さんんありつるといひければ、藏人の中におくりける、とし行の朝臣「玉だれのをがめやいづらこよろ

ぎの磯の浪わけおきに出にけり」これは酒瓶也。新撰字鏡に「瓶薄徑反、水加女」

○かめのこう 今東國のゐなかの児童の詞に、龜を指てかめのこうといへり。こはよぶことり、ぬえことりなどの如く、子をそへて龜子と云ことを音

便にこうとは引て云なるべし。古今六帖三、よみ人しらず「ふる川のそこのこひちにありときくかめのかうともしらせてしがな」これも直に龜をさしてかめの子と云るなれど、如此ともしらせてしがなと云に借たれば、音を轉じて用ひし也。そは貫之のうたに甲を劫に借轉してよめる類也。

○かもじ かづら 髪の助けにそふる髪をか

もじと云は、轆筋の意なるべし。此物古くはかづらといへり。和名抄に「髪。和名加都良。釋名云。髪少者所以被助其髪也」とあり。又芝居の役者と云もの、頭に被るを、今かづらと云は、鬢より轉り來し名也。又伊勢桑名の郷中にて、兒女の輩の髪に懸きと、古き人いへり。これ古風の遺れりしもの也。(猶ともじを參照せよ)

○かもす 釀也。万葉十六十三に「味飯乎水爾釀成」と有て、集中にも紀記にも、歌は本より、詞にも、古くは加牟とのみ云り。字鏡に「釀造酒也。佐介加无」とあるが如し。こは麴して造る以て名とな

れる也。和名抄に「麁釋名云音菊。和名加無太知。朽也。詩之使生衣朽敗也」とあり。これを漢籍訓點などに、加毛須とよみならひたるは、右の加牟を體語になして、爲の言を添たる也。

○かや。夜著。蚊帳也。梅窓筆記上云『蚊屋ノコト古見エシハ、皇太神宮儀式帳ニアリ。又吉田鈴鹿家記「寶德元年四月九日、花園殿ヨリ御萬籠一、荷蚊帳一張、ヘリトリ一枚、小夜着一つ、御本所江参ル」此ヘリトリト云ハ、今云寝ゴザナルベシ』

○がや。 「がなる」を見よ。

○かやつ。 「やつ」を見よ。

○かやのぬけめ。夫木集卅雜、源仲正「山がつのいほりはかやのぬけめよりわりなくもる、春の雨かな」

○かや。 葦屋也。空穗、藤原君二十「すみたまふ屋は、三間のかや屋かたしはつち云々」又二十一「ちひさきかや屋あみたれしとみ、ひとまあけて」

○かゆき所に手がとつかぬやうちや。 唐詩評云「詩不著題如三歸靴搔痒」續燈錄云「上堂更或」

拈拂敵<sup>タタケ</sup>床。大似隔<sup>カクニ</sup>靴抓癢<sup>タタケナラ</sup>無門關云「押<sup>タタケ</sup>捧打<sup>タタケ</sup>月。隔<sup>カク</sup>靴爬<sup>タタケ</sup>痒<sup>カク</sup>」

○から。 江戸人の詞に「さうだから」「かうだから」「それだからわるい」など云るは、故の意也。又

常に「今朝から」「昨日から」「東から」「西から」など云は、自の意也。雅言には、神代紀に「一夜之間」とやうにあひだの意に多く云れへど、其中に万葉四十五七二十に「ゑまし、からに」又七十八に「手にとりしからに忘ると」十一廿相見しからに「二十三丁四十四十六丁に云る加良は、故の意にも通て聞ゆ。又古今物名に「あふからものは猶こそ悲しけれわかれん事をかねて思へば」又「浪の音のけさからことに聞ゆるは春のしらべやあらたまるらん」紀貫之集「藤の花咲ぬるを見て時鳥まだなかぬからまたれける哉」忠峯集に「いかで人たれからさきにわたりける哉」

人しれず口からものをおもふころかな」土佐日記に雪はふりつゝ、清輔集「ちかひしをおもひかへるの

からまかりて云々」これらは皆自の意なり。

○からあやしやうじ 「いやうじ」を見よ。

○からうと 世に櫃の大きなるをからうと、云ふは、辛櫃の音轉なるべし。ひとふと同音なれば、からふとかと思ふやうなれど、折櫃ををりうづと云ふと、同じくて、うと云が音便の例にぞある。延喜式三「臨時祭鏡新宮地祭、韓櫃二合」源氏物語、桐壇「とんじき祿の辛櫃」

○からかさ 中務内侍日記に「御馬をよくさうじて、此御馬はかさにおどろきやし侍らんと申せば、いしくさうしたりとて、衆人わが身さうせよ」と云に、かみは何事もめでたく渡らせ給ふに、つねは御からかさおどろきやさぶらふならんとさうし申したくしきもの「からかさ」同十左丁に「からかさをさしたるに、風のいたく吹て、よこさまに雲をふきかくれば、すこしかたぶきてあゆみくる」散木集六「雨のふりければ笠さんとしけるに、馬のおどろきければよめる「さしかはす身をからかさのあやしきにわがこまにさへおどろかれぬる」東鑑井六三十一丁「甚雨八

間於唐笠下勤行之」今云、長柄名義は久老の物の釋中に「から笠のからは、からくりのからに同じ。ろくろ細工の物にいふ一の詞なり」と云り。其意なるべし。但しからうす、からすき等の如く、軽き意に云る多し。

○からかふ 爭也。現存六帖「かた山のそがひにたてるは、かしは風にからかふほどのさやけさ」盛衰記名虎相撲條に出。

○からかみ 古へは絹もて張さまなるが、後には唐紙にて張る事となりて、名となれる也。台記別記「久安六年正月七日取寢殿簾中調度未立。上達部座障子可張絹。今日猶爲唐紙不可然。九日張絹」とあり。かゝれば唐紙して張は略也。新撰六帖、ものへだてたる「こよひさへ事しげしとてあふ事をちがへやりとのたてるからかみ」千載集物名「からみのかたき」

○がらく 「からり」を見よ。

○からくと笑ふ 「けらく笑ふ」を見よ。

○からげる カらげるなど記すは、皆俗言のまを出す也。今もからぐるとも云めり。宇治拾遺八

「ひがさのうへを、又おとがひに繩にてからげつけ、かせ杖をつきてはしりまはりて」

○からす鳴のわろき よろこびがらす

神武

紀十二「天神子召汝怡笄過々々々。兄磯城忿之曰。聞天壓神至。吾爲慨憤時奈何鳥鳥。若此惡鳴耶。乃

鸞弓射之鳥即避云々」とある、これ其本なるが如し。

又「次到三弟磯城宅而鳴之云云。善乎鳥汝鳴之。若此者歟。卽作三葉盤八枚盛食饗之云云」こはよろこび鳥と云に似たり。これ神代より吉凶を告る事のありけん故に、かゝる語り傳へもあるなるべし。

○からす羽にものをかく 烏の羽に文字を書

て、高麗よりおこせし事、敏達紀に見えた。金葉戀上、顯季「わがこひはからすばにかくことはのうづらぬほどはしる人もなし」新拾遺集秋下、西行「からすばにかく玉づさの心して雁鳴わたる夕やみの空」

○からひつ 「ひとつ」を見よ。

○からまる 万葉廿三丁に「みちのくの荆の末に

はふまめの可良麻流伎美乎わかれかゆかん」

○からり がらく 「空のからりと霧た」

「物のからりと破れた」などもいひ、又「がらく鳴」とも「ぐわらりとおちた」などもいふめり。大鏡五に

「男君太郎は、左衛門督さねのぶと聞えさせし云々。いみじき上戸にてぞおはせし。此關白殿の一年の臨

時客にあまりゑひて、御座にゐながら立もあへ給はで、物はき給へるにこそ、かう名のもろたかゝ書た五代記に「雷がらくと鳴に」猫冊子に「貝をがらくとすりあはせて」なども云り。

○雁がとべばいし龜もじたんだふむ 是は身の

ほどを思はずして、人をうらやむを云諺なり。莊子云「西施病心而曠其里。其里醜人見而美之。歸亦捧心而曠其里。其里之富人見之堅閉門而不不出。貧人見之挈妻子而去之走。彼知美臚而不知瞼之所以美」こゝにも此類ひの事多かれども今不

く贅之。

○かりしほ しほあひ 剌時也。新撰六帖一、

光俊朝臣「うら風にはまだのをしね打なびきはやかりしほになりぞしにける」夫木八、清輔朝臣「かり

しほのそともの麥も朽ぬらしほすべきひまも見えぬ  
五月兩」これらのはしほは海上の潮時に蟹へいひそ  
めたることにやあらん。軍書に其機をよく計るをし  
ほあひと云て、敵のゆだんを見すまして「かゝりし  
ほ」「打しほ」などいへり。刈しほもそれと同じ。

○かりて 「かて」を見よ。

○かりのことぢ 慈鎮和尚「たまづさのかきあ  
はせたるしらべかなかりのことぢにみねの松かせ」  
○かりはか 「はかゝゆく」を見よ。

○かりやすぎ

「こり」を見よ。

○かるこ 狩子也。獵人の猪、鹿など捕とき、  
狩集る者を云。和名抄に「文選云。列卒滿山。和名  
加利古」とある是也。江戸深川の娼家に、加留古と  
稱婦女子あり。是も妓女を狩催はさする方より廻し  
云なるべし。又問屋むきの荷を持運ぶ者をも、かる  
こと云。こはこゝかしこへ馳あるかするより出て、  
足輕の輕に同じ名ときこゆ。

空穗、祭使丁「左の

のり尻は右近のせうよりはじめて、もの、ふしまで  
いちもちをえらび、右ののりしりは左近の曹までえ

らび云々」行囊抄東遊に引る文永の紀行に「此荷をわ  
かちてかるしりの馬どもに附そへよかしと云つゝ云  
々」

○かれぎ 「ひともじ」を見よ。

○枯木にはなさく 千載、釋教、前大納言時忠

「たのもしきちかひは春にあらねどもかれにし枝も  
花ぞ咲ける」續詞花、覺延法師「雪ふればちかひた  
のもし初瀬山かれたる木にも花咲にけり」山家集下  
「此春はえだくごとにさかゆべしかれたる木にも  
花咲にけり」同下、千手經三首「花までは身に似さ  
るべし朽はてえだもなき木の根をながらしそ」著

聞集六管絃歌舞「いづれの佛のねがひより、千手のちか  
ひぞのもしき、かれたる草木もたちまちにはなさ  
きみのるとときたれば云々」模なり千手陀羅尼經  
云「此大神咒々。乾枯樹尙得生枝柯葉華。何況有識  
衆生身有病患治之不差者必無是處」文選七十七魏專  
植文云。「弁言乃鑿使窮澤生流枯木發榮」

○かれひ 「かて」を見よ。

○がんくみつくちよ 東國にて兒輩雁の飛を  
見て「がんくみつくちよ、跡のがんが先にたば、

かうがいとらそ」と云。いかなる言とも解がたし。もしさ雁々見て居るうち、跡の雁が先に立ば、後悔とらうぞと云言を、小兒のかたなり口に訛れるにや。さて此説既に空穂物語に出て、いと古き事阿部あと

の雁の條に引つ。

○かんざし 筵 中古にかんざしと云しに二種あり。一つは總角の簪の左右に附る花簪也。今一つは冠に刺花釘也。そは太子傳玉林抄十五卷云「カンザシ定圓法印歌ニ」「ミノリハマダアゲマキノホドナガラ花ノカンザシサシテ教ヘシ」と有て、即聖徳太子十六歳の御像の、髪の兩方に附給へる花簪是也。其像は法隆寺に傳へて、近來は物に多く摸出して人もしる所也。又和名鈔に「四聲字苑云。簪和名加無左之。拂冠釘也」とある、此二種の内今世の女子の髪に刺かんざしと云物は、右の總角の花簪のなごり也。又源氏物語等に云るは、たゞ髪の事にて、これらとは別ことなり。そは若紫卷九丁「つらつきとらうたげにて、まゆのわたりうちけぶる、いわけなくかいやりたるひたひつき、かんざしいみじううつくし」とある、此かんざしは髪の生ざまを云て、目つきをめ

ざしと云類也。混すべからず。又笄と云物も冠に用しが本也。和名抄に「蒼韻篇云。簪笄也。係也。所以下拘冠使不墜也」とあり。今世に用る所もわがねたる髪を解さらしむる爲にて、其心ばへおのづから相似たり。

○かんしん 甘心也。韻會云「甘心快意也」  
○勘當 勘事 勘當とはもと、罪ある人の其罪の状を律令にあはせて、何の罪科に當ると云罪名を勘へさだむるを云也。又是を勘事ともいへり。即

事の状を勘るよしにて、同じ事を輕く云のみ。是を後には其人を見はなち、義絶する事に云やうになれれば、自然の事歟。さてそのかうじをかうすともいひけんにや、續世繼等には假名もてかうすと書たり。又かうづとあるもすを寫しあやまれる也。明月記、文共被追却知行二所他人已給其身出家了云々」十訓抄卷一「京極太政大臣宗輔公は、蜂をいくらともなく夜可引馬仰嫌行乎辭退今一人、蒙殿下勘當子息四人相

飼給ひて、なに丸か丸と名を付てよび給ひければ、

召にしたがひて、恪勤者などを勘當し給ひけるには何丸某をさして來との給ひければ、そのまゝにぞふるまひける」又勘事の例は、明月記「嘉祿二年四月卅日。前右馬頭公廣朝臣。去月廿五日出家云々盜取兄姫爲妻仍父勸事去二月件女産之間終命因茲出家云

分下。如來在世禁制我等。戒律嚴峻。我等甚不堪布施。心不堪忍尋自捨命者。今舍利弗是也」

○かんばし 「かうばし」を見よ。

## きノ部

々

○邯鄲カシタニにあゆみをうしなふ 莊子云「子獨不聞。夫壽陵餘子之學行於邯鄲與。未得國能又失其故行矣」此事後漢書、班固傳、又抱朴子等にも見えたり。

○邯鄲夢枕 異聞錄云「道者呂翁經邯鄲道上。邸舍中有少年盧生。自稱其貧困。言訖思寐。主人方炊黃梁爲饌。翁乃採懷中枕以授生。枕兩端有繩。生夢中自竄入其家。見其身富貴五十年。老病而卒。欠伸而悟。顧呂翁在傍。主人炊黃梁而未熟。枕中記云「上略開元中呂翁云々。翁取囊中枕。以授之曰。枕當榮適如願云々」とありて、凡てかはる事もなし。

○かんにん 塙忍也。法華經七妙音菩薩品廿四問諷多寶如來。安穩少惱。塙忍久住不。大涅槃經後

○きキ 季也。源氏、玉鏡に「此月はきのはてなるぬなかびたる事をいひのがる云々」河海抄に「三月、春の季の終也」夫木六、公朝「たけくまの松のこすゑに春と夏とふたきをかけて藤さきにけり」是は季に木をよせたり。又忌もいくとせの忌になど、端詞などに多かれども今略之。

○き某 キモク キサケ キソバ キイツ キバン これらのきは、正純にて、他物をませず。他に染らず、物に委ねず、其物のまゝなるを云。物語書に「まだ世にそます伎須久におはして」など云るも、生たるまゝなるよしなり。世に生酒、生蕎麥など生字を書ならひたるものその意也。

○さう キ 辻君をひきみて出る男を、江戸にてさ

うと云。これは牛宰の、一人にて牛を三十も五十も

七十も率て牽ありくに、たとへたる稱なるべし。

○急々如律令

此語はもと公文の常語にして、

たとへば上に下知狀を書て、其末に此旨を守り心得べき事、急々といそぎて、既に律令に見えし如くにせよと教へ説る詞也。然るを後世陰陽家の厭勝の符に如此かくは、其趣意たがふに似たり。しかしながら鬼神を叱し戒むるにも、公條の文を借用ひし、當時和漢ともに律令を世に重みせしほどを知べきなり。又近世は祈禱僧の咒文の末にも、此語をかけて其所以をしらざるものかし。聽雨紀談明都穂「急々如律令○道家符咒。其末皆云。急々如律令。說者謂。

とあり。

○牛馬よく人に從ふ

或書云「所有獸の中に、

」

牛馬ばかり人を助け、國用を足しむる物なし。其牛

馬萬國の内に、吾皇朝ほど疾く剛きもなしとかや。

さて皇國には其他の無用の獸屬をらずして、如此有用の物の疾き、凡てかゝる物まで萬國に優れたる、  
るもの、強剛に性尖く、人を突ものもり。備中備後  
暨長門邊の牛は、性慈順にしてつかひよし。馬は甲  
妻信濃疾く、陸奥溫厚也」といへり。

○きうへん 忽變也。前漢書六十六車千秋傳「千  
秋上急變。訟太子冤○注。師古曰。所告非常故云急

文「若三日之内。一雨霧靄。是龍之靈。亦人之幸。禮無不報。神其聽之。急々如律令」

○きうさがり 灸下也。昔は女房などの灸治を

するには、暇を賜はりて里に下りてせし故に、今に宿下りをきうさがりと云詞のこれるなり。山槐記「仁平二年九月六日。參關白殿申實長朝臣灸治暇事」

讀作雷部鬼神之名。而善走。用之欲其速也。此律令平聲。

○急々如律令。漢之公移常語。猶宋人云符到殊不然。急々如律令。漢之公移常語。猶宋人云符到奉行。漢米賦張陵。私創符咒以惑愚民。亦借用之。

咸使知聖朝有拘區之難。如律令○李善曰。風俗通曰。謹按律者法也。臯陶謨虞云如造律。時王使制曰令。道家遂祖述之耳。文選爲袁紹檄豫州陳孔璋「布告天下。夫吏者始也。當先自正。然後正人故文漢書著甲令。書如律令。言當履繩墨。勤不失律令也○呂延濟曰。

○きうまい 紹米也。貝原好古、續風土記曰「延喜式及和名抄に、筑前國正稅公廨天子に奉るを正稅と  
るを公廨と各二拾万束とあれば、筑後を合せて四拾万

はいふ束なるべし。一束に五升の米を得れば、四拾万束にては、現米二百萬石也。是筑前筑後國一年の土貢米也。古へは賦稅の輕くして、下民に取の少き事斯の

ごとし。近世は田の秋稼を三分にして、其二を

二ツ  
は數

地代金と土貢貢なりとして、公へ奉り、其一分を農人の所

得と定りしは、豊臣秀吉公より初れるよしきこゆ云

云」伊勢貞丈曰「鎌倉の代には、何の國何と云所に

て、幾町賜はると云。室町家の代まで同じ。信長公

秀吉公の代には、何貫文の地を賜ふと云。永樂錢の

つもり也。御當家にては何千石何百石と云也。米三

拾五斛を、高百石とす。或曰此高は粟のつもり也。

この故に半五收納する也」ともいへり。

○きうり 散木集十連歌「ちまき馬はくびから

きはぞにたりける「きうりの牛はひくちからなし

○祇園會山桟 中原康富記云「嘉吉三年六月七

日。祇園祭禮也。神幸並梓山已下風流如例渡ニ四條

大路二者也」

○きか 貴下也。後の物には常なれど、はやく臺記にも「足下」など云べき處に「貴下」とかゝれたる事、所々に見えたる。

○きかさぬる 爲忠朝臣集「もみぢばも千入に

そめて山姫のきかさねたりし衣がさの山」又「ふる

郷へ霞の衣きかさねて寒きこしづへかへるかりが

ね」

○きかすがほ 堀川院御時百首、右近權少將師

時「こゑくになく虫はとむるをきかすがほ

にて秋のくれゆく」

○きがへ 着替也。濱松中納言四「きがへの御

ぞども、ひせりと尼君とにわけ給らせなどして」宇

治拾遺きがへとりよせてきかへて

○木からおちた猿 赤染集「三日比、石山へこ

もりたる夜、谷に猿のなきしに「たよりなき旅とは

我ぞおもひいづる木をはなれたるさるもなくなり」

淮南子「猿狖蹶而失木枝」

○きかまり 合戰の時、敵陣の近邊へ様子を

うかゝひにゆくを、きかまりと云ひ。軍書の中に

多く見ゆる詞にて、誰もきか知る事なれば、今引迄

もあらぬ也。或人此詞の意を問ひるに就て考るに、  
こは聞鬻鳴の中略なるにやあらん。中古の詞にあな  
かまなどいへるかま也。万葉十四東歌に「かななるま  
しつみ」とよみたるも、鬻鳴静而の意なればなり。  
○きくもさくぐるしう云々

○きくもさくぐるしう云々

落書露顯序「世のきくみくをふさ  
ぎ侍りながら」大鏡序「いときくみくとほければ、ち  
かさほとりより申さんとおもふに侍り」

○きく さかぬ 承諾をきくといひ、不承  
引一をさかぬと云ふも古言のまゝなり。古事記上に

「吾者不聞汝等之言」

○菊御紋 葉室大納言頼親卿、右衛門佐たりし  
ほど、文應元年八月新院石清水御幸記一卷あり。そ  
れに御装束をしるせるに「赤色御袍葉室文中菊八葉、蘇芳  
有文御帶」と見ゆ。菊の御紋と申すはかやうの文の御例  
になり來しなるべし。

○さくわい 奇怪也。續世繼かりかれ「あしよし  
の御けしきはなくて、まことにさくわいなりとぞお  
ほせられける白河院 御語」

○きげん 機嫌也。機嫌とも云歟。後漢書廿四  
「馬嚴傳云。明德皇后既立。嚴乃閉門自守。猶復慮  
致譏嫌。遂更徙北地。斷賓客云々」中阿含經云「預  
知機嫌」亦方便品因縁釋云「感亦機嫌云々」今按  
に、字書に「機發也。嫌嫌疑也」とありて、機は弓  
の將にはなたんとする意、嫌疑はうたがはしく分明  
ならざる也。然れば向へる人のけしきのよさあしさ  
を見てその機嫌をしたがたより用ひたる歟。又機は  
機の蝶つがひの意と見んも相ちかし。いづれにも言  
のもとは、みけしきなど云けしきより出て、字は後  
に當たる也。

○きげんをとる 此言中古の書には只とるとの  
みいへり。齊宮女御集「又宮のおはしける時に、母  
うへの御かたちなどを、今の北の方の語りきこえ給  
ひて、御ぐしのめでたかりしはまたあらじとて、と  
ろをとる」などの如し。但しけしきをとると云る、  
即今のかげんをとるといふ言なり。

○さざく 「さだ」を見よ。

○きさり　虱の卵をきさりと云。和名抄に「浮蟻」また「酒蟻」を「和名佐加岐散々」と云り。

○きさはし　「さだ」を見よ。

○きざむ　曾禰好忠集、十二月初「うばそくがあさなにきざむ松のは、山の雪にやうづもれぬらん」此うた松の葉をくひし據とすべきものなり。

○きしき　儀式也。落満四<sup>二十</sup>「さうぞくどもしわらひたるぎしきいとめたし」

○きしやうづぎ　起請繼也。紙の奥を上へ次たるを然云ことは、起請文のおくには、神明の御名を記す故に、これを恐れ奉りて、奥を上へ繼となり。此事薩戒記に出たり。

○きしろふ　きしめく　保憲女集「雨ふればにはにきしろふうたかたをいづれかさきにきえんとぞみる」枕冊子<sup>段</sup>十七「きしめく車にのりてありくもの、耳にきかぬにやあらんと、いとにくし」語此きしろふといふ詞、源氏にて考へ合すべし。右のうたにては、來しらふと云やうにもきこえたれど、今昔にあらそひきしろふとつけたり。

○きずなき玉　夫木卅五難、二條太皇大后宮肥

後「おとろふるひなのわかれのかなしさにきづなき玉の身をぞうちむる」

○させ　「ひら」を見よ。

○させながら　近世軍器の事記せる書に、着長とは、中昔後別に一つの制あり、とやうにいへるはひが事也。先此稱の例は、源平盛衰記に、入道院參の金の所に「入道は小具足取てつけ、腹巻着て、中門のろうに出立給へり。主馬の判官盛國此有様を見て、あなあさましと思ひければ、小松殿にはせ参り、世は既にかうと見え侍り。入道殿<sup>キサカガ</sup>著背を召れたりと云」又平家物語に、木曾最期の段に「木曾殿今井四郎只主従二騎になりてのたまひけるは、日來は何ともおぼえの鎧が、今日は重くなりたるぞやと宣へば、今井四郎申けるは、御身もいまだ羸<sup>フカ</sup>れさせ玉ひ候はず。御馬も弱り候はず。何に依て一兩の御着背を、俄におもくは思しめさるべき。それは御方に續く勢が候はねば、臆病でこそさは思しめし候らめと云」又太平記に、上山討死の段に「只今捕此陣へよすべしとはおもひもよらず。上山閑かに物語せんとて、執事の陣へ行ける所に、東西南北騒ぎ色めきて、敵よせ

たりと打立ける間、上山我陣へ歸り、物貿せん逗留なかりければ、師直が著背の料に、月毛の鎧を二領まで置たりけるを、上山走よつて唐櫃の緒を引切て、鎧を取て肩にかけゝるを、武藏守が若黨の袖を扣へて、これはいかなる御事ぞ、執事の御著背にて候物を、案内も申され候はでと云て、奪ひとらんと引合ける時、師直是を聞いて、馬より飛て下り、若黨をはたと睨で、云かひなきものゝふるまひかな。只今師直が命に代らん人に、縦ひ千兩の鎧なりとも何か惜かるべきぞ。こゝのけと制しける云々」又後太平記第十一、内野合戦の段に「大樹其日の御装束は例式の御小袖を召れずして、薰フスべ革の御腹巻の中二通り黒皮にて威したるに、月毛の五枚甲を着玉ひ中略抑今日の御小袖を召れざる事は何ぞや。御小袖は朝敵御退治の召るゝ先例の御着背なり云々」凡此等を合せてみれば、たゞ御召の鎧の事にて、妻子臣妾より崇めていふ稱也。雅言の上にも、弓は執すものなれば、みとらしと崇め、太刀は佩カケすものなれば、みけしみはかしとたゞへ、衣はきますものなれば、みけしと敬ひ崇め云と同じ心ばへにて、臣妾等より着せ参

らする方もて、させながとはたゞへそめたるとなへなり。足利殿の比にては、御小袖をさへ同じくさせながと云しに合せて、その意なるをしるべきなり。

○きそば 「き」を見よ。

○さだ さだく さざはし さざく

記傳七十九丁云「段をさだと訓は、和名抄に「筑前國鞍手郡新分爾比岐多」とある、此分字を岐多と云に同じ。豊後大分郡オホイタケも本は於保伎多なり。景行紀に「碩田」とかきて於保岐陀と可訓注あり云々」今按に、俗にさだをつくるとも、又さだくに切など云も、其意也。さざはしと云も、階に段のつけるをもて也。象をさざと云も、かれが鼻には段々のある故也。たゞさとは常に親しく通へり。即さだくをさざくとも、さざはしをさだはしとも云が如し。蚶をさざがひと云も、貝にさだくのあるゆゑ也。

○さだく 「さだく」を見よ。

○さたゝき 「つゝき」を見よ。

○北野キタノノイチヤ一  
夜松 神社考云「天暦元年移立祠于北野。九年三月託江州比良社宣禱良種」曰。大内北野

一夜生松千本。其所建社以可<sup>レ</sup>崇<sup>ニ</sup>天滿天神。於是朝

日寺僧最珍與<sup>ニ</sup>右京文子<sup>一</sup>勑<sup>ニ</sup>力爲造<sup>ニ</sup>靈祠<sup>ニ</sup>

○きちにち 吉日也。詩經云「吉日庚午既差<sup>ニ</sup>我

馬<sup>一</sup>」

○吉日良辰

文選云「吉日良辰置<sup>ニ</sup>酒高堂<sup>ニ</sup>以御<sup>ヌ</sup>」

嘉賓<sup>ニ</sup>」

○きつしよ

吉書也。隆信集、賀「和歌所のり

うとに參りて吉書奏すとて」同「世をのがれてのち  
猶かへり參るべきよしおほせられしかば、參りて又

吉書に」

○きつゝき 「つゝく」を見よ。

○きつと 今世に「急度請合」「急度擇明」など

云、きつと、云言は、中古に、きと、云を、音便にツを

加へたる也。竹取物語に「御門、などかさあらん、猶

ゐておはしまさんとて、御こしをよせ給ふに、此か

ぐやひめきとかげになりぬ」隆信集「きとおどろき

たれば、此うつゝに云々。是は夢の覺たるにいへり

とむねふたがるこゝちするを「古本今昔三條「土佐

國堀金語に急、同廿九條「忽ニ急ト失ヌ」同廿八丁「人ヲ遣テ急ト御坐セト云ハセタレバ云云」宇治

拾遺三五「小式部内侍<sup>キ</sup>とみ<sup>ム</sup>をたつるやうにしけ

れば、入てふし給へる人、あやしとおぼしける」上

とあるこれらの中、今昔に急字を書たるをもおもふ

べし。されど此言の意は急の意のみにはあらず。際

の伎にて、きはやくなる方より慥なる方にも、俄

かなる方にも、上下のつきに幸れて聞え分る、

也。

○きづな 四季談二月「ながききづなも引出づべ

きものならんかし」

○きづね神

續古事談云「いにしへ野干を神の體となしたる社の邊にて、きづねを射たるもの有云々」上

云、きつと、云言は、中古に、きと、云を、音便にツを

加へたる也。竹取物語に「御門、などかさあらん、猶

ゐておはしまさんとて、御こしをよせ給ふに、此か

ぐやひめきとかげになりぬ」上隆信集「きとおどろき

出。將<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>怪必戴<sup>ニ</sup>髑髅<sup>一</sup>拜<sup>ニ</sup>北斗。髑髅不<sup>レ</sup>墜則化

爲<sup>レ</sup>人」上酉陽雜俎段成式云「狐夜擊<sup>レ</sup>尾火

○狐づかひ 中原康富記云「應永廿七年九月十

日丙日。今朝室町殿、醫師高天被<sup>ニ</sup>禁獄。父子弟等三人

也云云。此間仕狐之沙汰風聞。然而昨日於御臺御方仰驗者被加持之處。二疋自御所逃出。則被縛件狐之後被打殺。依此事高天ガ狐ヲ奉ニ詣付之條露顯云云。仍今朝被召取云云。晝程又被召取陰陽助定棟朝臣。是モ仕狐之由有虛說云云。末代之作法淺間敷々々。同十月九日甲辰。後聞四人高天昨日被流讃岐國。後經朝臣同國被流之云云。是等皆狐仕之輩也。

○狐を馬にのせたやうぢや。こはたゞしからぬ事を云諺也。但し今昔物語云「むかし仁和寺の東に高陽川と云河あり。其河のほとりに、夕ぐれがたになれば清げなる女童たゞみ居て、馬にのりて京のかたにすぐる人あれば、其馬の尻にのせてたべとのぞみ、のせねれば四五町もすきて、馬よりおどり、下狐になりてにぐる事たびくになりぬ。其ころ瀧口の本所に、瀧口どもあつまりて物がたりのついでに、かの高陽川のきつねの事をかたる。其中にたけくいさめる男有て、われは彼女童をからめとらんといへば、殘るものどもいやなるまじとあらそひけるに、しかば明日の夜からずからめ來らんといひ

て、馬に騎て高陽川をわたりて、京のかたにゆく。案の如く件の女童いで来て、京へかへるが、日くれておそろしきに、其御馬の尻にのせて給候へといへば、瀧口いとやすき事なり。疾のれとて馬に打のせ、用意したるこしなはにて女童がこしを鞍に結つけられ歸り、同僚のおのの打よりて、たい松の火にてふすべければ、忽きつねにぞなりにける」とあり。又或怪談の書に「稻荷山の使に狐出けるに、途中に犬にあひて、行過る事あたはず。とやせんとテ居るに、をりしも農家の馬士來り。狐人に化て前の驛まで騎んと云。馬士わが馬は道中の傳馬にあらずと云。忽然れども賃錢よくばのすべしと云。馬士然らば何ほど出し給ふといふに、南鎌一つ與へんと云。こゝにおいて馬士のせて行けるに、其驛迄來ると消てうせてけり」とあり。もし昔よりかゝる事のありて、諺ともなりけるか。此時は其用ひやうかはるべし。人のいふ所をよく考へてさだむべし。予此諺たしかにき、定めず。

○きでん 貴殿也。小右記、寛仁三年の處に、人をさして貴殿といへる事あり。今昔廿四丁<sup>十三</sup>其は

貴殿トカノ人トコソ、此罪ヲバ負ツラメ」八雲御抄  
云「通俊むかひざまにいはく、貴殿は詩賦に長じ給  
へり」

○きど 木戸也。こは俗字のまゝに心得るはた  
がへり。言の意は漏處の急語に約れる也。されば其  
木戸を指て漏ともいひ、又其戸を指て漏戸とはいへ  
り。漏をくきといふは古語にて、古事記に「訓レ漏  
云々久枝」と有がごとし。

○きと見る 「みざめ」を見よ。

○きなるいづみ 黄泉也。空穂、藤原君十五左  
けおふる岩に千代ふるいのちをば黄なるいづみの水  
ぞしるらん」とてたまふ」万葉二二十一「山ぶきのたち  
よそひたる山しみづくみにゆかめと道のしらなく」  
これも上句は、黄泉の字に據て、山吹を黄色にとり  
山清水を泉にとりてよみ給へる也。さて道のしらな  
くとは、夜見路のしらがたきをのたまへるなるぞ  
かし。注皆非也。

○木に竹をつぐ 阿佛尼聞書云「もとの句をむ  
べくしくとり出て、木に竹をつぎたるやうなるも  
うたてし万葉十七、大伴宿禰池主影序に「俗語以レ藤

續錦」と云る、此語の心もおなじ。

○きぬかつぎ 「雲井のみのり」「きぬかつぎのも  
のみのものども」是平人の女房達二十人ばかり、  
物の女等を云 同上 「あらそひまわり  
たるきぬかつぎ」同 「きぬかつぎのやうにこそでを  
うへにかつぎて」同 「内裏の女房達二十人ばかり、  
いろくのきぬをかづきて云々」同 「そのほかさま  
くのきぬかつぎ」など見えたり。是今京の婦人が  
はゆるかつぎの事也。此事既に加部かつぎの條にい  
ひつ。

○きぬぢやみ 「しらら」を見よ。

○きね 社人を云。祓部の略語なるべし。此こ  
と神樂歌の釋にいひつれば、こゝに其歌どものみを  
引おく也。貫之集四「さか木ばのときはにあればな  
がけくに命たもてる神のきねかも」これも神樂の貫  
木の歌も、ともに木根に躋部を兼たるなり。忠見集  
まつる卯月にさける卯の花は白くもきねがしらけた  
るかも」大中臣能宣集、神樂し侍り「山人のたける  
庭火のおきあかしこゑ」あそぶ神のきねかも」小

大君家集「みづがきのあたりになれぬ。きねよりも神にいちじるく今はかさまし」新撰六帖、信實「ちはやぶる卯月のみしめあらためてきねがもろ聲はやうたふなり」

○きのはし 木頭也。落窓一之上十四「からしを木のはじにていとよはなちて」枕冊子十「おもはん子を法師になしたらんこそは、いと心ぐるしけれ。さるはいとたのもしきわざを、たゞ木のはしなどのやうに思ひたらんこそいといとほしけれ」徒然草は此に依て書り

梵綱經云「若佛子信心出家受佛正戒 中略 一切衆生眼不欲見犯戒之人。畜生無異木頭無異」

○きはだか きはたけし 繢世繼苦の衣「御心

ばへのきはだかにおはしけるにや。三條のあし宰相とぞ申ける」源氏、少女「よからぬ人のことにつきて、きはたけくおぼしの給ふもあちきなく」枕冊子二十「花の中より實の金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えける」今昔十九十怪「極シク密ク際、武ク

ヅ坐ガリケル」とある、此字の意にやらん。

○きはたけし 「きはだか」を見よ。  
○きはなき 無際也。佛語には多きことなれ

ど、歌なる故に舉おくなり。爲忠朝臣集「きはもなき不二の高ねのさみだれは雲と共にぞひたすともみる」

○きはまる 万葉三卅「いはんすべせんすべし  
らにきはまりて貴きものは酒にしあるらし」千五百番歌合、正三位季經「あなしふくなだの鹽ひにくも消て浪にきはまる月のかげかな」

○きび 「きみ」を見よ。

○きびしく 新撰六帖三、信實朝臣「山はざま、きびしくたゞむ岩かどにとしへてきれぬ瀧のいとかな」夫木集卅四、釋教、俊成「荒きうみきびしき山の中なれどたへなるのりはへだてざりけり」しのびね上「にがくしくきびしくたまへば」源氏、なでしこ「琴ついきびしう」濱松四「きびしくこもり力などし給はず」字鏡に「稠」

○きびしよ 今茶を煎する陶器に、きびしよとよぶあり。こはいかなる名かと思ひしに、急須の字の音轉なり。杜氏全集に「急須相就飲三斗」とも見え、又三餘贊筆に「呼暖酒器爲急須者。以三其應急而用也」とある是也。かゝる字音は、南京をナ

ンキンと云類の唐音より、其音の異風に轉せしなり。

○さふ 急也。堤中納言物語「思はぬかたにと

まらする少將ちか殿いときふにいさめたまへば」源

氏、浮舟「とのいときふにものしたまひて」

○さみ きび 氣味也。菅家文草に「期氣味

之克詞也」明月記「嘉祐二年四月廿二日。今朝送

賀札云云。自愛無極候之處被仰下候間彌添氣

味候了今よいきみとも、きびがよいとも云是也。

○君の仰せには親の頭をもさるべし。昔の諺に

「君の仰には親の首をも截」と云あり。或釋に云を

甚しく難じて、彼君至尊共至不親。母至親共至

不尊。父尊親義兼と云を、道の大本として、皇朝の

昔は道なかりし也と云るは、中々に道をしらぬなり。

此諺は古意を傳へたれば、君とは天皇を指奉る也。

皇朝上代の神習ひより云ときは、まことに天皇の神

勅には、父母の頭をもやすく斬べし。主君と云にも

いろ／＼あり。昔の人の私君、私主といひしは、上

に天皇おはしまして、天皇より外に眞の君と申はあらざる故ぞかし。皇國の大道これを以て察すべし。

彼漢國には、大君なくして代々立かはる假の主のみ

なりければ、咸く私君、私主なり。故右の如く云ひ

しにこそあれ。皇朝におきても、天皇ならぬ私主君

のために、いかでか父母の頭はきらん。凡て神國と

人國と、明神吾天皇と、凡人王との差別をしらぬ人

多かるよりかゝる惑ひはあるなりけり。

○さむく 「き某」を見よ。

○さもごゝろ 空穗俊蔭「子うまるべくなりぬ。

けしきばみてなやめば、おうなきもごゝろをまどは

して云云」

○きもの 着物也。空穗、俊蔭下「草木の根を

くひものにし、いは木の皮をきものとし云々」又「屏

風几帳、きるものばかりは、さはいへどもひろかり

し所のなごりに」

○きもふとき 十訓抄二「これもきもふときわざなれども、かなしく支度しえたりけるこそおかしけれ」

○きもん 鬼門也。東鑑「嘉祐元年正月廿一日御願五大堂建立事。相州武州度々巡檢被撰鎌倉中之勝地云々。頗思召煩之處。相當于幕府鬼門方有此地。毛利藏人大夫入道西阿領也。依爲御祈禱

相應之處。被點之。即被引地訖。

○きやうか 狂歌と云字は、文粹一、源順の歌の小序に見えた。但しからの也。今云狂歌にはあらず。白氏文集廿九「秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌。凡二百三十八字律暫停盃觴吟詠。我有狂言君試聽。○客有詩魔者。吟哦不知疲。乞公殘紙墨。一掃狂歌詞。」

○ぎやうすゐ 湯水をつかふ事を行水と云は、本修行人の行するとて遣ふ水よりうつりたる詞なるべし。明月記「建久九年二月廿日、御八講始也云々。先是行水裝束了」太平記二、阿新事「五月廿九日の暮程に、賛朝郷を牢より出し奉りて、はるかに御湯もめされ候はぬに、御行水候へと申せば、はや斬らるべき時に成けりと思ひ給ひて」同四「先帝をば法皇になし奉るべしとて、香染の御衣を云々。毎朝の御行水をめして」

○ぎやくしゆ 逆修也。万代集、釋教、永縁「厄になりて、逆修しける人の導師にまかりて云々」散木集雜上「前齋宮の内侍の逆修しけるに」東鑑卅七四「武州有御病脳事頗危急之間。及可療逆修等之

儀  
○客殿キヤクデン

小右記云「參齋院於客殿云々」吉部祕訓抄云「文治二正十同記云大夫史廣房入來。先立中門外予出客殿」

○きやつ こいつ 枕冊子十「賀茂へまづさき「時鳥よおのれかやつよ、おれなきてぞ我は田にたつ」とうたふに、きゝもはてす」宇治拾遺五六にきやつにはからぬること中たがひして云々」これら相合するに、きやつと云は、彼奴の轉語なり。又宇治拾遺に「くやつ」とも「こやつ」とも云るに合するに、今こいつと云も、此奴コヤツを訛れるなり。夜と伊と通へり。〔猶「やつ」を参照せよ。〕

○九尾狐 呂氏春秋「禹年三十未娶。行塗山。恐時暮失嗣辭曰。吾之娶必有應也。乃有白狐九尾而造于禹。禹曰。白者吾服也。九尾者其證也。于是塗山人歌曰。綏々白狐九尾麗々。成于家室。我都悠昌。于是娶塗山女。」白虎通「狐九尾者何。狐死首丘不忘本也。明安不忘危也。必九尾者何九

妃得其所子孫繁息也。於尾何明後當盛也」潛確類書郭璞贊「青丘奇獸九尾之狐有道翔見出則銜書作瑞周文以標靈符亦王褒四子講德論文王應九尾狐而東夷辭周武王獲白魚諸侯同辭」山海經「青丘山九尾狐能食人食人不盡」又同書云「青丘之國有狐九尾。德至則來。注。青丘國有東海之北」今按に通俗白虎傳と云物は、此等の書に少く本づく所ありて戲作せしものならん。又俗に玉藻前など云九尾金毛狐の狂言は、白虎傳を修飾せしなるべし。

○きよがき 清書也。十六夜日記「五十首のうたをよみたりけるとて、きよがきもしかへす」

○きよげん 後漢書廿六陳元傳。固執虛言傳受之辭。以非親見實事之道」同廿三樂恢傳「聖人聖惻不虛言也」

○きよどう 魚道也。鳴呼爲草云「魚道の事つれり」草に委くいへれど、猶思ふに、大和國平群谷往馬谷の民俗の常談に、茶の飲のこりを今も凝當といへり。然れば凝當の字と定むべきもの也。あやしの賤の言葉にのこれる、慥かなる證とすべし。さすが舊都の國なる事をおぼゆ」とあり。

○きよつとする 恩管抄六云「大嘗會御禊の御幸の日にて、朱雀門くづれ、世の人もきよつとおもへり云々」とあり。かゝる詞のそのかみあらんとはおもひもよらぬ事也。

○きりかふろ 切禿也。此すがたいと古し。神樂朝倉に「あさくらやおめの湊にあびきをればあまのめざしになびき逢にけり」古今廿に「こよろぎの磯たちならしいそ菜つむめざしむらすなおきにをれなみ」此等の目刺の事也。貌まで髪を垂しかけて、目の上にて切故に云。今は七八歳十二歳迄に限れるを、昔はやゝ比たちて男するほど迄も、さるすがたなるがありつらん。戀の歌によみたるも、これかれ見ゆ。此事は既に神樂歌入文、また鐘の響の三編、男女髪の状に委くいへば省きつ。

○きりこ 寛平御時后宮歌合、よみ人しらず「鴈がねは風を寒みやはたおりめくだまくおとのきりきりとする」

○きりこ 燈籠名也。俳諧五節句云「切子燈籠いろくの紙にて張もあり。只白紙計にてながきもあり」佗山石云「世俗にきりこ燈籠と云ものあり」

これは雜職の執事所の棒にきりこの棒と云あり。其棒の首と燈籠の形様とが同じ事なるによりて名づけたるなり。元來此棒は衛府の警固に用る所にして、金吾の棒と云といへり。今按に、さる事歟。又たゞ切組燈籠と云べきを、組を略轉してきりこと云にあるべし。

○きりじ 吃哩字也。拾玉集四十一達華部「ながめられおなじひじりのめぐりゐるきりじの蓮むねにひらきて」新撰六帖、秋月、光俊「しひて見る秋のきりじのうへにこそ猶九重のうちはすみけれ」此外賴政集下、夫木集に出、其注、歌林拾葉に委く釋せり。

○きりしば 切芝也。夫木廿八雜、光俊朝臣「もゝしきの庭のきり芝ふるゆきにこれを限りとぬれしそでかな」

○きりたて 二條大皇大后宮大貳集「殿のひんがしおもてにきりたてをしおきて、二三日參らぬほどに」東鑑十七二十御所北壇構三切立皆被用レ松記傳十四一丁十『鑽出火ハヒヲキリイデ、と訓べし。和名抄に「鑽

和名比岐利。燈和名比宇知」とあり。凡て火を出すに打と切との異あり。上代より忌て清くする火は、皆鑽出すことにて、今に至るまでも、大神宮の御饌打。用火切」と見えたり。さて伎留と云は、輒磨炊く火などは皆然なり。玉藻に「神宮之習不用火打。用火切」と本同言なるべし。今俗には毛美火とも云り。靈異記に「鑽岐里。又母美火」とあれば、古へより毛牟ともいひしなり。雖にて穴を穿を、俗に伎理毛美と云。雖と云名は、伎留具なる故なるに、其伎留を毛牟とも云る是も用言也」とあり。

○きりやう 器量也。文選郭有道碑文「棄伯噽」夫其器量弘深。姿度廣大」これを俚俗には、かほかたちのうるはしき方にいふは、其うつはの方より轉じたる也。

○きりをたつる所もなし 莊子云「堯舜有天天下焉」  
下。子孫無置錐地「前漢書云「舜無立錐地」有馬騎驛のつまづき 十訓抄一「人に一たびとがあればとて、重き罪を行ふ事よく思量あるべし。駢驥といふ質き獸も、おのづから一頃のあやまちなき

にあらず。人としていかでかそのことわりをはなれん」

○きばをくひ出す 空穂、俊蔭上「あすら云々。

車の輪の如く見るべかして、きばをつるぎのごとくくひ出して」

○きるゝ 所<sup>キル</sup>也。断は雅言にはたゆどのみ云。故にきるゝと云は俗言かとおもふに、古事記、

靈栗宮段、志毘臣歌に「おほきみのみこの柴垣やふじまりしよりもとほし岐禮、牟志婆加岐」とある、是「將<sup>マサニ</sup>截柴垣」にて、垣の断截れんと云なり。新六帖三、信實「山はざまきびしくたゝむ岩ごとに年へてきれる瀧のしら糸」

○きれ 物の切はし也。大和物語に「いとかうばしきかみに、きれるる髪をすこしかいわがねて」和泉式部集に「宮法師になりて、髪のきれおこせ給へるを道」續世繼白川わたり「紫檀のきれ殿に申て、そのかうらんのをれたるつくろはん」今物語に「ゆふしでの、きれに書たりける」林葉集三「さをしかのむねわけにする小萩原たゞきれ、きれのにしきなりけり」山家集下「しかのたつ野へのにしきの、きれはし

はのこりおほかるこゝちことをすれ」又此絹布の切をさいでとも云、それは佐部に出。

○きろく 狹衣二「きろく」となしたてまつりてもさげ尼の」とあり。若今きよろくと云ことの本かともおもへど、定めがなければ只此まゝに出しおくなり。猶きらくの轉にやあらん。

○機を見てたつ 易繁辭云「君子見機而作。不俟時日」

○きをり 新六帖三、光俊「ものになれぬ家にあるいもがたく柴のきをりに人をまちやこふらん」松浦宮物語上「くにのならひいともきをりに、ことぐしくて」盛衰記三七「田舎侍ノ氣折ニコハシカリケルガ云々」此言今も所によりて、老人などの云ことあり。是も既に出せし「さすべ」「さむく」など云生なり。

○ざん 昔の銀の價を見かくるに就て引おく也。秋齋間語ニ「室町殿日記云。一中間衆之木綿卅五疋買取、御役舟產三に上らせ申候。可有御請取候。是もこつまに劣らぬ木綿にて候。壹疋、六分、七厘之賣買に而

て候間、其御心得可有之候。一御局衆、はした衆、切米拾貳石買はらひ可申由被仰越候。此比兵庫之賣買壹石ニ付六、勿三分五厘之由、すいた屋新左衛門申候。其御心得可有之候。十二月二日岡村忠右衛門殿佐野權助殿、飯尾五左衛門殿、林甚五郎此時天文九年なりシ類聚名物考に引く「請取金子之事 合百文目者」但銀拾文目付壹石替也。右之米拾石はらひ、升を以請求取所、實正也。仍如件 慶長四年四月廿五日使馬場千左衛門、各勝勝右衛門兵部印印」これは古田兵部米を拂ひて、銀子を請收し證文也。

○さんさ 「すなこ」を見よ。

○近習 禮記「雖々有貴戚近習、毋々有々不々禁。

註近習其嬖幸者」

きんびらむすめ きんびら牛房 玉露證話云

「淨留理の起りは、さして久しき事にはあらず云々。和泉大夫が淨留理は、岡清兵衛といへる者作る。いつの比の事にか、金時が子を金平キンボウといひ出してより、渡邊綱が子をも武綱タケツチといふ事をもてはやしてより、昔咄にもせし辨慶、時むね、朝比奈などいふ勇士もかの金平にはなか／＼及ばざる事のやうに云つのり

ければ、怪力亂神を好むは人の心ゆゑ、この金平をかたるをさゝへては、拳をにぎり牙をかみてよろこびし故に、三歳の童子も金平は勇猛の人と云事、日本國に弘れり云々」已といへり。今是によりて按するに、世に心づよく勇ましき娘子を、今もきんびらむすめと云言のあるは、其ころのなごりなるべし。又牛房を織に切て、それに唐辛を加へて煮たるをばきんびら牛房と云も、同斷にて、こは金平が如くつよき者ならでは得くはじと云心もて名づけそめたるにやあらん。或人の家にもたる古き畫に、平字を紋につけたる大童子の、酒飲をる前に肴あり。鰯にも蟹にも唐がらしを枝ながらさしはさめり。是金平ならんといへり。然ればいよ／＼よしありげなり。

○さんむく きんむく これらのもくは純一の意也。万葉二に「水つたふいそのうらみのいはつ、じ不丘開道乎またも見めかも」此木丘は借字にて、躊躇は花の盛となりては、罷を敷たる如く、一面に唉しくものなりければ、純一開とはよみし也。此語は續記の詔詞に多く見ゆ。それらをも引て、既に鐘の響二卷七十に委くいへればこゝには省きつ。むく犬、

自むく等のむくも准へて知べし。鳥の瀧櫛<sup>フツク</sup>は生毛<sup>ウツブ</sup>にて、ふりき毛の謂なれば別也。混ふべからず。是又かの書中にことわりつ。

○さんむく 「さんむく」を見よ。

## くノ部

○くきだつ 壅立也。夫木十六、冬、隆房「つ  
のくにのこやはなにゝかかくるらんくきのみ見ゆる  
霜がれのあし」

○くぎぬき 今俗に城の壁に四角なる穴ある  
を、くぎぬきといふ。又そを紋に附たるをも、くぎ  
ぬきと云り。こは釘貫の義にて、工匠の大釘貫とい  
ふ具に、鐵の四角なるに打かねを入れ、拔物ある其  
形に似だるを以て云出たるならん。又關のくぎぬき  
といふは、荒垣ともよみて、棚を結廻したる構へ  
の中に、旅人をまとめて通す木戸ある故に云て、漏  
抜の意なり。此事は既に鐘の響にもいひ、又雅言部  
にも委しかれば省けり。

○くぐつ 魁儡也。隆信集下、「ぐつによする  
戀<sup>くまぐ</sup>にうつる心もかゝみ山影みぬ人をこふ

るものかは」六百番歌合にも寄傀儡戀あり。續詞花  
雜下、傀儡にかはりて、能因「いづこともさだめぬ  
ものは身なりけり人のこゝろをやどらするまに」千  
賀屋草五云「和歌の題に傀儡と書て、くぐつとよみ、  
遊女の事とす。こは、人形舞しの事なるべきに、何  
とて遊女の事に混じけんとおもひしに、攝津國西宮  
より人形舞、世間をめぐりはじめて、遊女の形を  
第一に立てつかふ。知ぬ是より轉じ來れると見えた  
り」とあり。さる事にてもあるか。されど遊行女婦  
舟の上のあそびめなどを云ることはなくして、たゞ  
驛路岸頭の賤き賣婦を云るは、かの草船の何となく  
嫌はずとり入る、に譬へたる詞にはあらじ歟。其心  
ばへ傀儡子の箱と、もはら同じかれば也。

○くじつ くごなは 万葉三<sup>三十</sup>に「しほひの三  
津之海女<sup>ノシマヒメ</sup>の久具都持玉藻かるらんいざゆきてみん」  
空穂<sup>さがの院中</sup> 古本吹上、「中納言はきぬあやをいとのくじつ  
にいれて」枕冊子<sup>トリモてる物</sup>「くじつのことり」袖中  
二二十世に「くじつめと申は、さやうの龍の目のつま  
りたるを云に」若冲万葉類林云「袖中抄に「裏類貝」  
源氏抄云「くじゅ海邊に香附子の葉に似て、うらにかど